

香川県警察本部機動隊舎建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

汲仏遺跡

2018.3

香川県教育委員会

序文

本書には、香川県警察本部機動隊舎建設工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市多肥下町（たひしもまち）の汲仏遺跡（こんぼとけいせき）の報告を収録しています。

汲仏遺跡では、弥生時代前期の二重環濠に囲まれた環濠集落を検出しました。高松平野での環濠集落の調査例は少なく、高松平野での人々の生活の歴史を知るうえで貴重な成果をあげました。また、弥生時代後期の溝からは土器が大量に投棄された状態で見つかり、他県からの搬入品も含め製作地が複数想定されることがわかり、この地域の集落の土器の搬入状況を知る資料を得ることができました。

汲仏遺跡の調査成果が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関ならびに地元関係者各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝申し上げるとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

例 言

1 本報告書は、香川県警察本部機動隊舎建設工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市多肥下町に所在する汲仏遺跡（こんぼとけいせき）の報告書である。

2 発掘調査は、香川県教育委員会を調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

平成 10 年度

期間 平成 10 年 10 月 1 日～平成 11 年 3 月 31 日

担当 文化財専門員 岡本 利 文化財専門員 山元 素子

平成 12 年度

期間 平成 12 年 6 月 1 日～平成 12 年 7 月 31 日

担当 文化財専門員 藏本 晋司 文化財専門員 増井 泰弘

4 調査に当たっては建設省中国地方建設局營繕課、香川県警察本部の協力を得た。また、報告書作成に当たり、平成 9 年度に高松市教育委員会が実施した隣接地の立会調査との成果の照合について、高松市創造都市推進局文化財課の協力を得た。記して謝意を表したい。

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆担当は以下のとおり、編集は山元素子が担当した。

第 3 章第 3 節 SD205(遺物部分) SD301 藏本晋司

第 4 章第 1 節 渡辺正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)

第 4 章第 2 節 パリノ・サーヴェイ株式会社

その他 山元素子

6 本報告書で用いる座標系は国土座標第Ⅳ系(世界測地系)で、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SA 構造 SB 掘立柱建物 SH 坚穴建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 ST 墓

SD 溝 SX 性格不明遺構 SZ 耕作痕

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位m)である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。

10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 遺物の時期等については主に次の文献を参照し、本文中の時期・様式の表記をこれに拠った。

弥生時代前期

信里芳紀 2002 「讃岐地方における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」

『第 16 回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』

古代

佐藤竜馬 2016 「9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種 讚岐における古代～中世土器編年をめぐって」

『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』

中世

佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文

化財発掘調査報告第 4 冊 空港跡地遺跡 IV』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の経過	1
第2章 立地と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	7
第2節 土層序	7
第3節 遺構・遺物	18
第4章 自然科学分析	
第1節 汲仏遺跡出土サヌカイト製遺物の産地同定	115
第2節 汲仏遺跡の花粉分析	118
第5章 まとめ	121
第1節 遺構の変遷	121
第2節 高松平野の環濠集落について	127

挿図目次

第1図 道路位置図	1
第2図 周辺道路位置図	5
第3図 調査区割図	6
第4図 I区 東壁断面図	8
第5図 I区 南壁断面図	9
第6図 II区 東壁断面図	10
第7図 II区 北・南壁断面図	11
第8図 III区 東壁断面図	12
第9図 III区 南・西壁断面図	13
第10図 IV区 東壁断面図	14
第11図 道構配置図	15 ~ 16
第12図 IV区北・南壁断面図	17
第13図 弥生時代前期ピット 平・断面図、出土遺物	18
第14図 SK101 平・断面図、出土遺物	19
第15図 SK104 平・断面図、出土遺物	19
第16図 SK107 平・断面図、出土遺物	20
第17図 SK109 平・断面図、出土遺物	21
第18図 SK120 平・断面図、出土遺物	22
第19図 SK121 平・断面図、出土遺物	23
第20図 SK201 平・断面図	24
第21図 SK203 平・断面図	24
第22図 SK204 平・断面図、出土遺物	24
第23図 SK205 平・断面図、出土遺物	25
第24図 SK206 平・断面図、出土遺物	25
第25図 SK213 平・断面図、出土遺物	26
第26図 SK214 平・断面図、出土遺物	26
第27図 SK215 平・断面図、出土遺物	27
第28図 SK311 平・断面図、出土遺物	27
第29図 SX211・SX212 平・断面図、出土遺物	29 ~ 30
第30図 SX211 遺物出土状況	31
第31図 SX211 出土遺物(1)	32
第32図 SX211 出土遺物(2)	33 ~ 34
第33図 SX211 出土遺物(3)	35 ~ 36
第34図 SX212 出土遺物	37
第35図 SX215 平・断面図	38
第36図 SX215 出土遺物(1)	39
第37図 SX215 出土遺物(2)	40
第38図 SX216 平・断面図	42
第39図 SX216 出土遺物	43
第40図 SD204 平・断面図、出土遺物	44
第41図 SD208 平・断面図、出土遺物	45
第42図 SD101 平・断面図、出土遺物	46
第43図 SD302 平・断面図	47
第44図 SD302 出土遺物(1)	48
第45図 SD302 遺物出土状況	49 ~ 50
第46図 SD302 出土遺物(2)	51
第47図 SD302 出土遺物(3)	52
第48図 SD103 平・断面図、出土遺物	53
第49図 SD308 平・断面図	54
第50図 SD308 出土遺物	55
第51図 SH401 平・断面図	56
第52図 SB102 平・断面図	57
第53図 弥生時代後期ピット 平・断面図、出土遺物	57
第54図 SK103 平・断面図、出土遺物	58
第55図 SK108 平・断面図、出土遺物	59
第56図 SK110 平・断面図、出土遺物	60
第57図 SK111 平・断面図	60
第58図 SK113 平・断面図	60
第59図 ST001 平・断面図、出土遺物	61
第60図 ST002 平・断面図、出土遺物	62
第61図 ST003 平・断面図、出土遺物	63
第62図 SX101 平・断面図、出土遺物	64
第63図 SD102 平・断面図、出土遺物	65
第64図 SD205 平・断面図	66
第65図 SD205 遺物出土状況	67 ~ 68
第66図 SD205 出土遺物(1)	69
第67図 SD205 出土遺物(2)	70
第68図 SD205 出土遺物(3)	71
第69図 SD207 平・断面図	71
第70図 SD301 平・断面図	74
第71図 SD301 遺物出土状況	75 ~ 76
第72図 SD301 出土遺物(1)	77
第73図 SD301 出土遺物(2)	78
第74図 SD301 出土遺物(3)	79
第75図 SD301 出土遺物(4)	80
第76図 SD301 出土遺物(5)	81
第77図 SD301 出土遺物(6)	82
第78図 SD301 出土遺物(7)	83
第79図 SD301 出土遺物(8)	84
第80図 SD301 出土遺物(9)	85
第81図 SD301 出土遺物(10)	86
第82図 SB101 平・断面図(1)	87
第83図 SB101 断面図(2)・出土遺物(1)	88
第84図 SB201 出土遺物	88
第85図 SB201 平・断面図	89 ~ 90
第86図 SB202 平・断面図、出土遺物	91 ~ 92
第87図 SB203 平・断面図、出土遺物	93
第88図 SB204 平・断面図、出土遺物	95
第89図 SB301 平・断面図、出土遺物	97 ~ 98
第90図 SB302 平・断面図、出土遺物	99
第91図 SA201 平・断面図	100
第92図 SA202 平・断面図、出土遺物	101
第93図 SA301 平・断面図、出土遺物	101
第94図 SA404 平・断面図	102
第95図 古代ピット 平・断面図、出土遺物(1)	103
第96図 古代ピット 平・断面図、出土遺物(2)	104
第97図 SK301 平・断面図、出土遺物	105
第98図 SD201・SD202・SD203・SD206 平・断面図、出土遺物	106
第99図 SD311・SD312・SD313 平・断面図、出土遺物	107
第100図 SD314 ~ SD322 平・断面図、出土遺物	108
第101図 SK105 平・断面図、出土遺物	109
第102図 SK302 平・断面図	109
第103図 SK401 平・断面図	109
第104図 SD401 断面図	110
第105図 SA401 平・断面図	110
第106図 SA402 平・断面図	110
第107図 SA403 平・断面図	111
第108図 SK312 平・断面図	112
第109図 SK402 平・断面図	112
第110図 SK403 平・断面図	113
第111図 SD104 平・断面図	113
第112図 道構外 出土遺物	114

第 113 図 花粉分析プレート内の状況写真	120
第 114 図 造構変遷図_弥生時代前期	123
第 115 図 造構変遷図_弥生時代後期	124
第 116 図 造構変遷図_平安時代	125
第 117 図 造構変遷図_中世	126

表 目 次

第 1 表 試料一覧及び同定結果	115
第 2 表 新たな原石群と遺物群	117
第 3 表 分析結果(元素比で示す)	117
第 4 表 分析試料一覧	118
第 5 表 花粉分析結果	118
第 6 表 SD205、SD301 出土弥生土器 器種別生産地の割合	121
第 7 表 香川県内の環濠聚落	128
第 8 表 土器観察表(1)	129
第 9 表 土器観察表(2)	130
第 10 表 土器観察表(3)	131
第 11 表 土器観察表(4)	132
第 12 表 土器観察表(5)	133
第 13 表 土器観察表(6)	134
第 14 表 土器観察表(7)	135
第 15 表 土器観察表(8)	136
第 16 表 土器観察表(9)	137
第 17 表 土器観察表(10)	138
第 18 表 土器観察表(11)	139
第 19 表 土器観察表(12)	140
第 20 表 土器観察表(13)	141
第 21 表 土器観察表(14)	142
第 22 表 土器観察表(15)	143
第 23 表 土器観察表(16)	144
第 24 表 土器観察表(17)	145
第 25 表 土器観察表(18)	146
第 26 表 土器観察表(19)	147
第 27 表 土器観察表(20)	148
第 28 表 土器観察表(21)	149
第 29 表 土器観察表(22)	150
第 30 表 土器観察表(23)	151
第 31 表 石器観察表	152
第 32 表 金属器観察表	152

図版 目 次

国版 1 汲仏遺跡 速景(南から)	
国版 2 I 区 全景(南西から)	
II 区 全景(北から)	
国版 3 III 区 全景(東から)	
I 区 全景(北から)	
国版 4 II 区 西半全景(南から)	
II 区 全景(西から)	
国版 5 III 区 全景(東南から)	
III 区 全景(西から)	
国版 6 III 区 全景(東から)	
IV 区 全景(西から)	
国版 7 I 区 南壁土層 東から 4 m付近 (SK121 付近) (北から)	
II 区 北壁土層 (南から)	
III 区 南壁土層 西から 2 m付近 (SB202 柱穴付近) (北から)	
国版 8 IV 区 北壁土層 (南から)	
IV 区 東壁土層(北西から)	
国版 9 I 区 SK101 土層断面(東から)	
I 区 SK101 遺物出土状況(南から)	
I 区 SK104 土層断面(南から)	
I 区 SK107 土層断面(北から)	
I 区 SK107 遺物出土状況(南から)	
国版 10 I 区 SK109 土層断面(東から)	
I 区 SK109 遺物出土状況(北東から)	
I 区 SK109 遺物出土状況(南西から)	
国版 11 I 区 SK120 土層断面(東から)	
I 区 SK121 土層断面(北から)	
I 区 SK121 遺物出土状況(北から)	
国版 12 I 区 SK121 遺物出土状況(北から)	
II 区 SK204 土層断面(北から)	
II 区 SK205 土層断面(西から)	
II 区 SK205 遺物出土状況(西から)	
II 区 SK206 土層断面(東から)	
II 区 SK213 土層断面(南から)	
国版 13 II 区 SX212 土層断面(北から)	
II 区 SX211 土層断面(東から)	
II 区 SX211 遺物出土状況(北から)	
国版 14 II 区 SX215 土層断面(北から)	
II 区 SX215 土層断面(北から)	
II 区 SX215 土層断面(西から)	
II 区 SX215 土層断面(西から)	
II 区 SX215 完削(西から)	
国版 15 II 区 SX216 遺物出土状況(東から)	
II 区 SX216 土層断面(西から)	
国版 16 II 区 SD208 土層断面(北から)	
II 区 SD208 遺物出土状況(北西から)	
I 区 SD101 土層断面(西から)	
III 区 SD302 土層断面(西から)	
III 区 SD302 土層断面(北から)	
国版 18 III 区 SD302 遺物出土状況(北東から)	
III 区 SD302 遺物出土状況(北西から)	
III 区 SD302 完削(南西から)	
I 区 SD103 土層断面(東から)	
I 区 SD103 遺物出土状況(南東から)	
III 区 SD308 土層断面(北から)	
III 区 SD308 遺物出土状況(南から)	
国版 20 III 区 SD302-308 全景(南東から)	
III 区 SD302-308 全景(南から)	
国版 21 I 区 SB102 全景(東から)	
I 区 SB102(SP1057) 土層断面(東から)	

図版目次

I 区 SB102(SP1056)	土層断面(東から)	
I 区 SB102(SP1061)	土層断面(南から)	
I 区 SB102(SP1058)	土層断面(南から)	
図版 22 IV 区 SH401	全景(西から)	
I 区 SK103	土層断面(南西から)	図版 32
I 区 SK108	土層断面(西から)	
I 区 SK110	土層断面(東から)	
I 区 SK108	遺物出土状況(東から)	
図版 23 I 区 SK110	礫出土状況(東から)	
I 区 ST001	土層断面(西から)	
I 区 ST001	遺物出土状況(東から)	
図版 24 I 区 ST001	遺物出土状況(北西から)	図版 33
I 区 ST002	遺物出土状況(南から)	
I 区 ST002	遺物出土状況(西から)	
図版 25 III 区 ST003	遺物出土状況(東から)	
II 区 SD205	遺物出土状況南北(北から)	
II 区 SD205	遺物出土状況南北(南から)	
図版 26 II 区 SD205	遺物出土状況(北から)	
II 区 SD205	遺物出土状況(南から)	
III 区 SD301	東壁(西から)	
図版 27 III 区 SD301	土層断面(a-a')(北東から)	図版 34
IV 区 SD301	北壁(南から)	
IV 区 SD301	土層断面(d-d')(北から)	
IV 区 SD301	遺物出土状況(北から)	
図版 28 III 区 SD301	遺物出土状況(南西から)	図版 35
III 区 SD301	完掘(北東から)	
IV 区 SD301	完掘(南西から)	
図版 29 IV 区 SD301	遺物出土状況(東から)	
IV 区 SD301	遺物出土状況(東から)	
IV 区 SD301	遺物出土状況(東から)	
IV 区 SD301	北壁部分(南から)	
III 区 SD301	遺物出土状況(東から)	
III 区 SD301	遺物出土状況(東から)	
図版 30 I 区 SB101	全景(北東から)	
I 区 SB101	全景(東から)	
I 区 SB101(SP1072)	土層断面(北から)	
I 区 SB101(SP1095)	土層断面(南から)	
図版 31 III 区 SA201-SB201-202	全景(南から)	
II 区 SB201(SP2041)	土層断面(西から)	
II 区 SB201(SP2046)	土層断面(北から)	
II 区 SB201(SP2048)	土層断面(西から)	
II 区 SB201(SP2024)	土層断面(西から)	
II 区 SB201(SP2025)	土層断面(西から)	
II 区 SB201(SP2028)	土層断面(南から)	
II 区 SB201(SP2028)	遺物出土状況(南から)	
II 区 SB201(SP2023)	土層断面(北から)	
II 区 SB201(SP2011)	土層断面(南東から)	
II 区 SB202(SP2011)	遺物出土状況(南西から)	
II 区 SB202(SP3002)	土層断面(北から)	
II 区 SA201(SP2069)	土層断面(南から)	
III 区 SB301	全景(南から)	
III 区 SB301(SP2087)	土層断面(西から)	
III 区 SB301(SP6002)	土層断面(東から)	
III 区 SB301(SP6009)	土層断面(西から)	
IV 区 SA4041(SP4017-4027)	半裁状況(南西から)	
IV 区 SA404(SP4017)	土層断面(東から)	
IV 区 SA404(SP4027)	土層断面(東から)	
IV 区 SA401-402	全景(南から)	
IV 区 SA403	全景(北から)	
IV 区 SK401	土層断面(南から)	
IV 区 SZ401	操作痕(南から)	
IV 区 SA404(SP4017)	出土土器(1)	
IV 区 SA404(SP4027)	出土土器(2)	
IV 区 SA401-402	出土土器(3)	
IV 区 SA403	出土土器(4)	
IV 区 SK401	出土土器(5)	
IV 区 SZ401	出土土器(6)	
IV 区 SA404(SP4017)	出土土器(7)	
IV 区 SA404(SP4027)	出土土器(8)	
IV 区 SA401-402	出土土器(9)	
IV 区 SA403	出土土器(10)	
IV 区 SK401	出土土器(11)	
IV 区 SZ401	出土石器(1)	
IV 区 SA404(SP4017)	出土石器(2)	
IV 区 SA404(SP4027)	出土石器(3)	
IV 区 SA401-402	出土石器(4)	

付図目次

付図1 漢字遺跡構造平面図

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

香川県警察本部の機動隊舎を高松市多肥下町の四国管区警察局用地へ移転することに伴い、香川県教育委員会事務局文化行政課では事業用地内の埋蔵文化財の包蔵状況を確認し、適切な保護措置を講じるため、平成9年9月に試掘調査を実施した。その結果、事業地内全域に遺跡が広がるものと判断された。

事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、香川県教育委員会と建設省中国地方建設局営繕部及び香川県警察本部会計課の間で協議を行った結果、事業の実施に先立ち、文化財保護法に基づく保護措置を講じる必要があるため、発掘調査を行うこととなった。

第2節 調査の経過

平成10年4月1日付けで香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターで締結された「埋蔵文化財調査契約」に基づき、建築物建設予定地 2,470m²について、平成10年10月1日～平成11年1月31日まで発掘調査を実施した。



第1図 遺跡位置図

その後、事業地南東部に潜水訓練槽及びレンジャー塔を建設することになったため、平成 12 年 4 月 12 日付けで香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、当該地 360m²について平成 12 年 6 月 1 日～平成 12 年 7 月 31 日まで発掘調査を実施した。

整理作業は平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日まで実施した。遺物の実測・浮遊の一部については株式会社イビソクに委託した。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

平成 10 年度発掘調査体制一覧表		
香川県教育委員会文化行政課		
秘括	課長 小原 克己 課長補佐 北原 和利	秘括 所長 菅原 良弘 次長 小野 喬範
秘書	係長 中村 順伸 主査 三宅 陽子	秘務 課事 別枝 義昭 副主幹 兼係長 田中 秀文
	主査 松村 雅史	主査 長尾 寿江子 主査 新 一郎 主査 林 照代 主事 齋川 信哉
埋蔵文化財	副主幹 渡部 明夫 係長 西村 審文 主任技師 瑞崎 誠司	調査 課事 長尾 重盛 主任文化財専門員 大山 真光 主任文化財専門員 鹿野 史郎 文化財専門員 関本 利 文化財専門員 山元 素子 調査技術員 鳴井 理加

平成 12 年度発掘調査体制一覧表		
香川県教育委員会文化行政課		
秘括	課長 小原 克己 課長補佐 小国 史郎	秘括 所長 菅原 良弘 次長 川原 知草
秘書	係長 中村 順伸 主査 三宅 陽子	秘務 課主幹 大西 誠治 副主幹 兼係長 六幸 正雅
	主事 亀田 幸一	係長 新 一郎 主査 長尾 寿江子 主査 山本 和代 主任主事 高木 康晴 主事 長尾 重盛
埋蔵文化財	副主幹 渡瀬 常雄 係長 西岡 達哉 文化財専門員 鹿野 横也 文化財専門員 宮崎 聰治	調査 課事 主任文化財専門員 鹿野 史郎 文化財専門員 西村 審文 文化財専門員 関本 舜司 文化財専門員 増井 泰弘 調査技術員 鶴岡 多恵

平成 28 年度整理作業体制一覧表		
香川県教育委員会生涯学習・文化財課		
秘括	課長 小柳 和代 副課長 片桐 孝浩	秘括 所長 増田 宏 次長 青森 格也
秘書・生涯学習推進グループ	課長補佐 爰染 伊知朗 副主幹 松下 由美子	秘務課 課長（兼） 森 格也 副主幹 斎藤 敏好
	主事 和木 麻佳	主任 寺岡 仁美 主任 丸尾 真知子
文化財グループ	課長補佐（兼） 片桐 孝浩 主任文化財専門員 山下 平重 主任文化財専門員 鷺松 真也	資料普及課 課長 古野 徳久 文化財専門員 山元 素子 嘱託 青屋 真理 嘱託 甲斐 美智子 嘱託 高橋 千惠 嘱託 正本 由紀子 嘱託 麻生 后代

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

汲仏遺跡は、東を春日川、西を御坊川（旧香東川）に挟まれた高松平野の中央部付近に位置し、旧香東川によって形成された扇状地帯の中央部に立地する。周辺には条里型地割が広く展開するが、一部に帶状に地割の乱れるところがみられる。条里型地割に乱れる部分は地表面の微妙な高低差を反映していると考えられ、旧河道や氾濫原、低地部であったと考えられる。汲仏遺跡が立地する周辺地域は高橋学（1992）などにより微地形分析が行われ、遺跡周辺には埋没した旧河道が網の目のように分布することが明らかとなっている。

本遺跡は、居石遺跡から多肥松林遺跡へと続く流路と居石遺跡から北西へ蛇行しながら流れる流路の間の埋没中洲・自然堤防上に位置する。

第2節 歴史的環境

汲仏遺跡ではおもに弥生時代前期、弥生時代後期、古代の遺構を検出したので、これらの時代について記述する。

1. 弥生時代前期

汲仏遺跡では弥生時代前期 I c ~ II a 期（信里 2002）の環濠集落を検出したが、高松平野の環濠集落としては天満宮西遺跡、鬼無藤井遺跡などがあげられる。

天満宮西遺跡は汲仏遺跡から約 2km 北側の微高地上に位置する。弥生時代前期 I c ~ II a 期の集落で、汲仏遺跡と存続時期が重なる。一重環濠で長軸 80m、短軸 65m を測る。後世の削平により確認された遺構は少ないが、環濠内で土坑を 3 基確認した。天満宮西遺跡の南東約 100m の地点では弥生時代前期 II a ~ II b 期に相当する溝があり、天満宮西遺跡に続く集落の可能性が指摘されている。

同じく高松平野の環濠集落である鬼無藤井遺跡は、汲仏遺跡からは約 7km 北西に離れた微高地上にある、二重環濠を持つ集落である。存続時期は弥生時代 II a 期、規模は長軸 80m、短軸 60m である。環濠内からは竪穴建物 4 棟、掘立柱建物 1 棟、土坑数基が検出されている。鬼無藤井遺跡の前段階である弥生時代 I c 期には、600m ほど離れた西打遺跡に集落が確認されており、集落が移動した可能性も指摘されている。

汲仏遺跡の周辺では、前述の天満宮西遺跡の他は集落は見つかっていない。弥生時代前期 I b 期では多肥宮尻遺跡で旧流路、弥生時代前期 I c ~ II b 期では空港跡地遺跡で旧流路、突堤文期～前期 II a 期にかけて林・坊城遺跡では旧流路、溝などが検出されている。集落ではやや時期が下る弥生時代 II c 期～中期初頭の宮西一角遺跡や空港跡地遺跡がある。

生産遺跡としては、長池から大池へ至る旧河道が想定される周辺で、さこ・長池遺跡、上西原遺跡、弘福寺領田団北地区 C 区で弥生時代前期の水田遺構が検出されている。この 3 遺跡は近接しており、同一集団による生産遺跡とされている。これらはいずれも弥生時代前期後葉の洪水砂により埋没している。おそらく周辺の旧河道の洪水により一度に水田が埋没し、この時期の集落は生産基盤を失い消

減したとされている（高松市教育委員会 2002.12『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第6冊 天満宮西遺跡』）。

2. 弥生時代後期

汲仏遺跡の約750m南側に位置する多肥松林遺跡を中心とした多肥遺跡群では弥生時代中期中葉以降範囲に集落が形成される。中期中葉には多肥宮尻遺跡を主水源とする、基幹水路となる灌漑用水路が開削され、古墳時代後期まで維持管理される。中期後半には一度集落は途絶えるが、後期中葉頃から再び集落が形成され、後期後半頃には多肥松林遺跡、日暮松林遺跡を中心に小規模な集落が点在する状況がみられる。

約800m北側に位置する太田下・須川遺跡では、弥生時代後期から堅穴建物などの集落が営まれ、灌漑用水路の掘削も行われる。また、散在した状態で土器棺墓が2基検出された。

3. 古代

汲仏遺跡は古代の行政区画では香川郡多肥郷に位置する。多肥地域は古代の遺跡が多くみられる地域である。

約700m東側には山田郡と香川郡の郡界線、約2km南側には推定南海道がある。また、山田郡と香川郡の郡界付近の山田郡側は弘福寺領山田郡田園の範囲に想定されており、弘福寺領が付近にあったことが考えられる。本遺跡の東・北を通る道路は条里型地割の坪界線に復元できる。

空港跡地遺跡（県立図書館・文書館建設事業）では、8世紀後半を中心とした条里型地割と同方向の基幹水路と掘立柱建物群からなる集落を検出している。当該地は弘福寺領山田郡田園の南地区の一部とする復元案もある。

多肥松林遺跡は8世紀中頃～10世紀前半の遺跡である。木製祭祀具である資串・木製模造品や墨書き土器などが旧流路から多数出土し、水路維持に関する祭祀を行う場であった可能性が指摘されている。周辺では、居石遺跡、太田下・須川遺跡などで同様の木製祭祀具と墨書き土器をセットとした祭祀を行ったことが知られている。掘立柱建物群は規則的な配置をしておらず官衙施設とは考え難いが、帶金具や硯など官衙施設で出土例が多い、官衙的色彩の強い遺物が出土している。

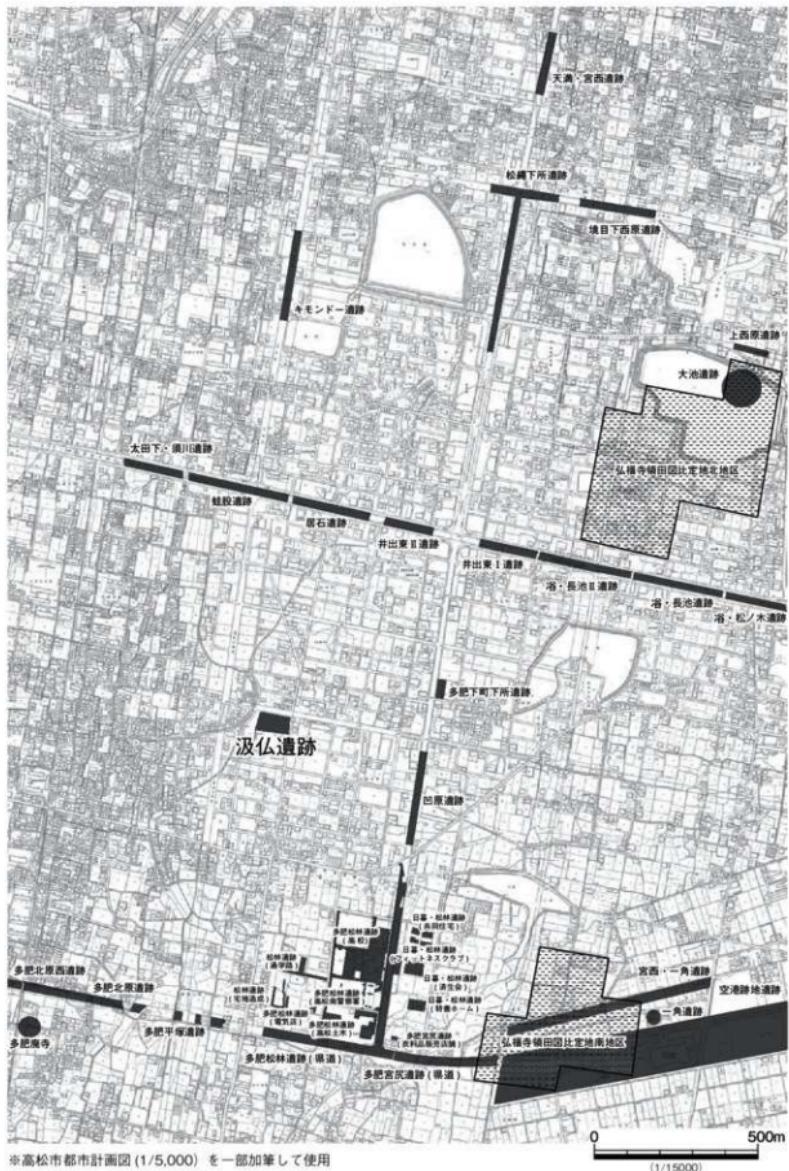
多肥北原西遺跡では、8～10世紀の道路状構造と大型建物が検出された。道路の交差点となる部分を中心に、交差点から西向き、東向きの交通上の目的地や南海道から分岐する北向きの道路の役割について考察されている。また、10世紀代の道路側溝からは鐵滓が多数出土している。

多肥北原西遺跡から100mほど南側では、多肥廃寺とされる古代瓦の散布地がある。現在は寺域も定かではないが、出土した瓦から平安期の寺院とみられている。

〈参考文献〉

高橋学 1992.3「高松平野の地形環境—弘福寺領山田郡田園比定地付近の微地形環境を中心に—」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書』高松市教育委員会

香川県教育委員会ほか 1995.3『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須



*高松市都市計画図(1/5,000)を一部加筆して使用

第2図 周辺遺跡位置図

川遺跡】

高松市教育委員会 1997.3 「都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 日暮松林遺跡」

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999.3 「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡」 香川県教育委員会

高松市教育委員会 2001.3 「高松港頭地区再開発関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 鬼無藤井遺跡」

信里芳紀「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」「第16回古代学協会四国支部研究大会
弥生時代前期末・中期初頭の動態—研究発表要旨—」 2002.12 古代学協会四国支部

高松市教育委員会 2002.12 「太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告 第6冊 天満宮西遺跡」

香川県教育委員会 2007.3 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊（県立図書館・文書館建設事業） 空港跡地遺跡IX」

香川県教育委員会 2015.3 「県道多肥上町志度線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡」

香川県教育委員会 2016.2 「高松土木事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥松林遺跡」



第3図 調査区割図

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

平成10年度の調査対象地は車庫予定地と機動隊舎建設予定地であった。作業ヤードの確保および調査面積を勘案し、車庫予定地をI区、機動隊舎予定地を2分割してII・III区とし、全体を3分割して調査を行った。また車庫と機動隊舎をつなぐ配管部分についても併せて調査を実施した。平成12年度はレンジャー棟建設予定地をIV区として調査を実施した。

遺構検出面までは重機を用いて掘削し、遺構検出面以下は人力により掘り下げた。

遺構名は、調査時は各調査区ごとに付したが、本報告書では全調査区を通じて新たに遺構名を付した。本文中の調査区の記載は発掘調査時のものを踏襲する。

なお第3図に示した網掛け部分は、平成9年度に高松市教育委員会が実施した水路改良工事に伴う立会調査の位置である。

第2節 土層序

I区（第4・5図）

東壁と南壁で土層図を作成した。概ね上面は厚さ20cm程度の造成土が覆うが、その下部は北部では耕作土・床土直下で灰色砂礫のベース、中央～南部では耕作土・床土の下部で厚さ5～10cm程度の褐灰色シルト層を挟む明黄褐色シルト・黄灰色粘質土などのベースである。遺構面のレベルは17.90～18.00m程度であるが、第3節で記述するように遺構面はかなり削平されていると考えられる。

II区（第6・7図）

II区では東南部で2面の遺構面が確認された。北端付近で造成土・耕作土・床土直下に砂礫のベースが認められ遺構はベース直上で検出したが、東・南側ほど第1遺構面である遺物包含層の堆積が厚く見られ、東南部で最も厚く堆積する。

東壁、北壁の一部、南壁の一部の土層図を作成した。

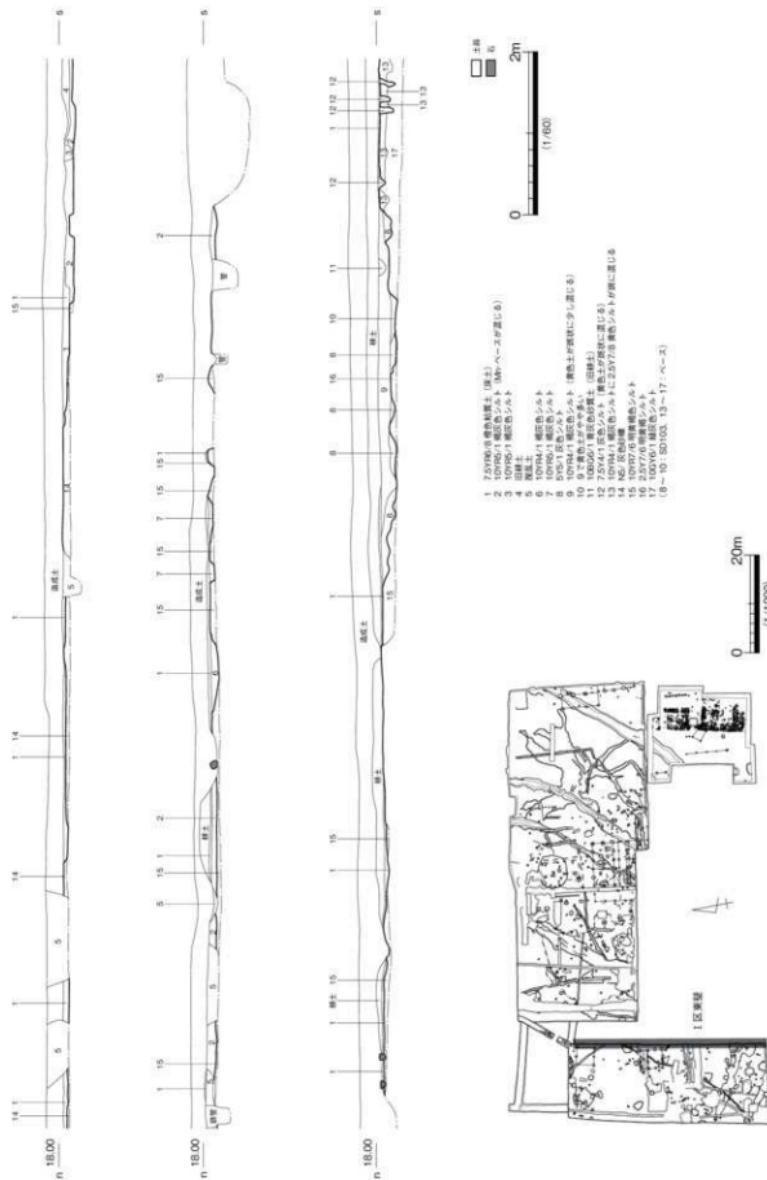
東壁では、造成土・耕作土・床土の下部に厚さ5cm程度の褐灰色粘質土層の遺物包含層が堆積する。この上面が古代の遺構面（第1遺構面）である。包含層の下部は浅黄色砂質土のベースで、弥生時代の遺構面（第2遺構面）である。ベースのレベルは17.65m程度である。

北壁では旧耕土・床土の下部に灰色砂礫のベースがある。遺構面のレベルは17.90m程度である。

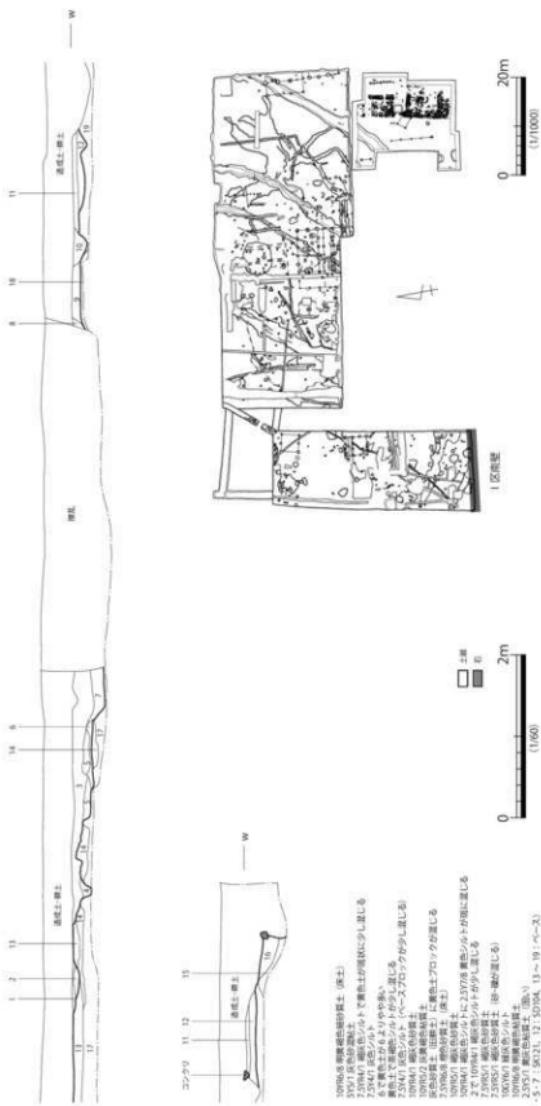
南壁の西側では耕作土の下部で厚さ15cmの黄灰色シルト層、その下部が黄色シルトのベースである。東側では厚さ10cmの黒褐色細砂質土の包含層が堆積し、その下部に灰色シルトのベースがある。遺構面のレベルは17.65mである。

III区（第8・9図）

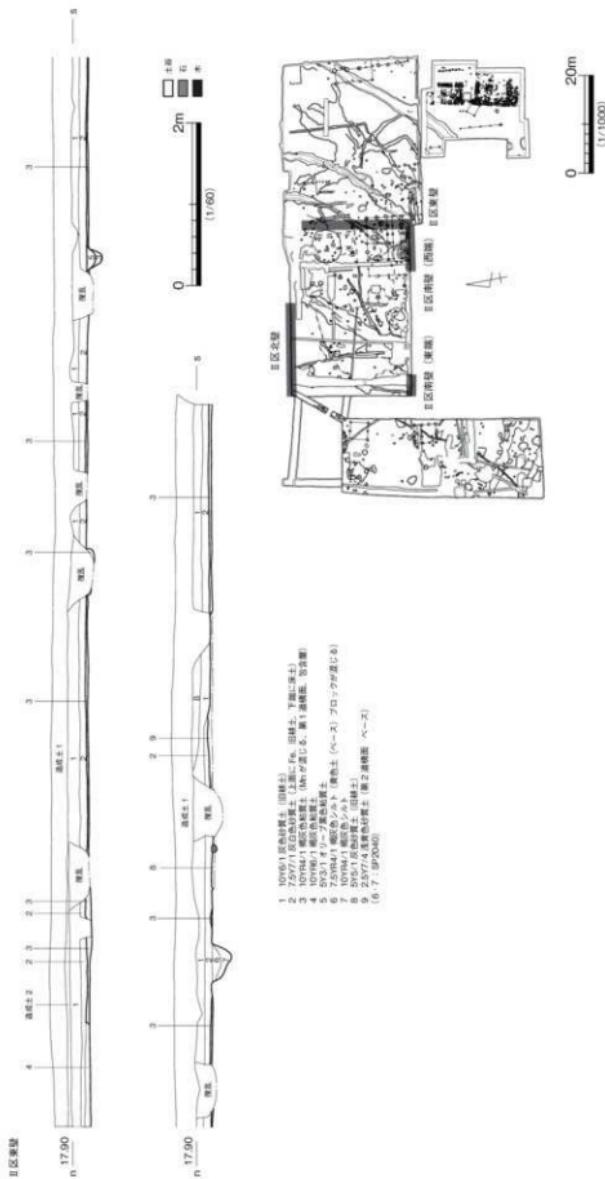
造成土・耕作土・床土直下で厚さ2～8cmの黒褐色細砂質土（非常に良く縮まる）の遺物包含層、その下部に明黄褐色シルトなどのベースがある。東側ほど遺物包含層は厚く堆積する。南北方向については遺物包含層の厚さはそれほど変化はないが、北側ほどよく縮まる。遺物包含層の上面が古代の遺構面（第1遺構面）、ベース直上が弥生時代の遺構面（第2遺構面）である。第1遺構面のレベルは17.5m、第2遺構面のレベルは17.4mである。



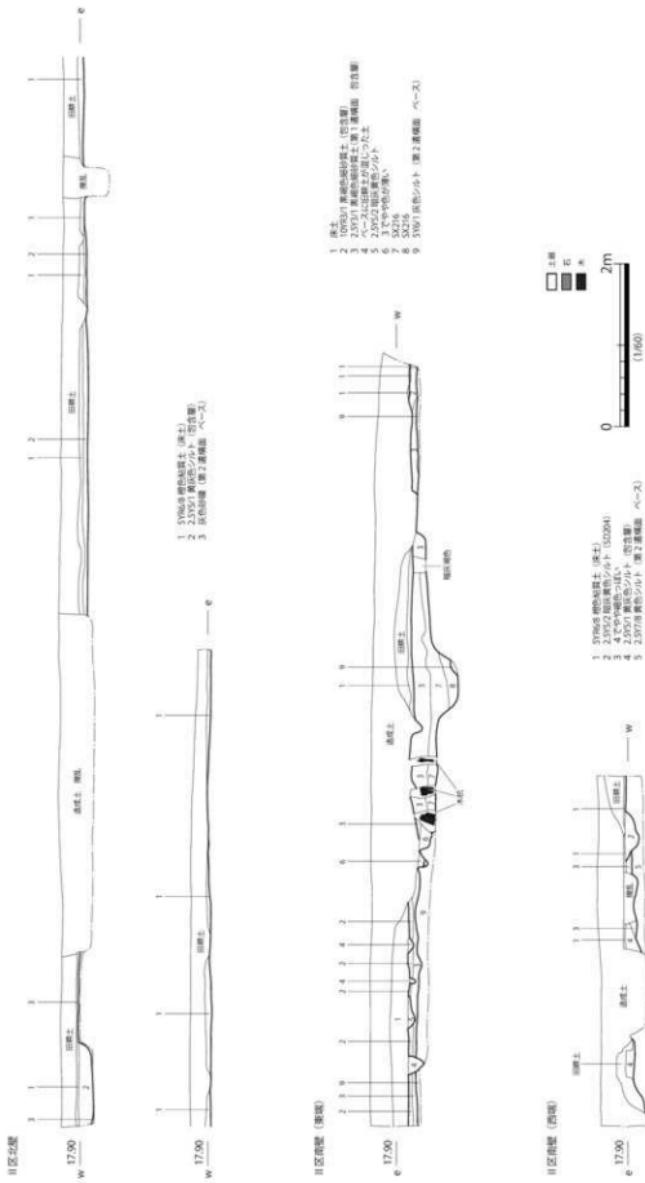
第4図 I区東壁断面図



第5図 I区南壁断面図

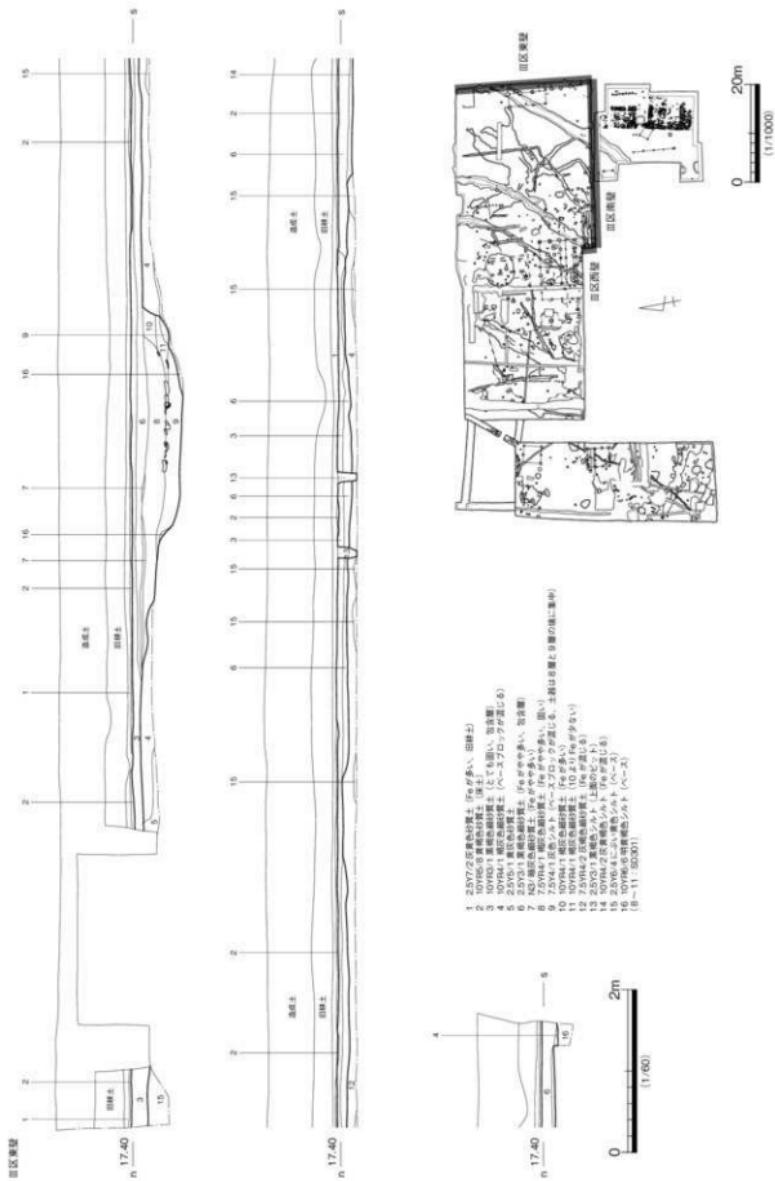


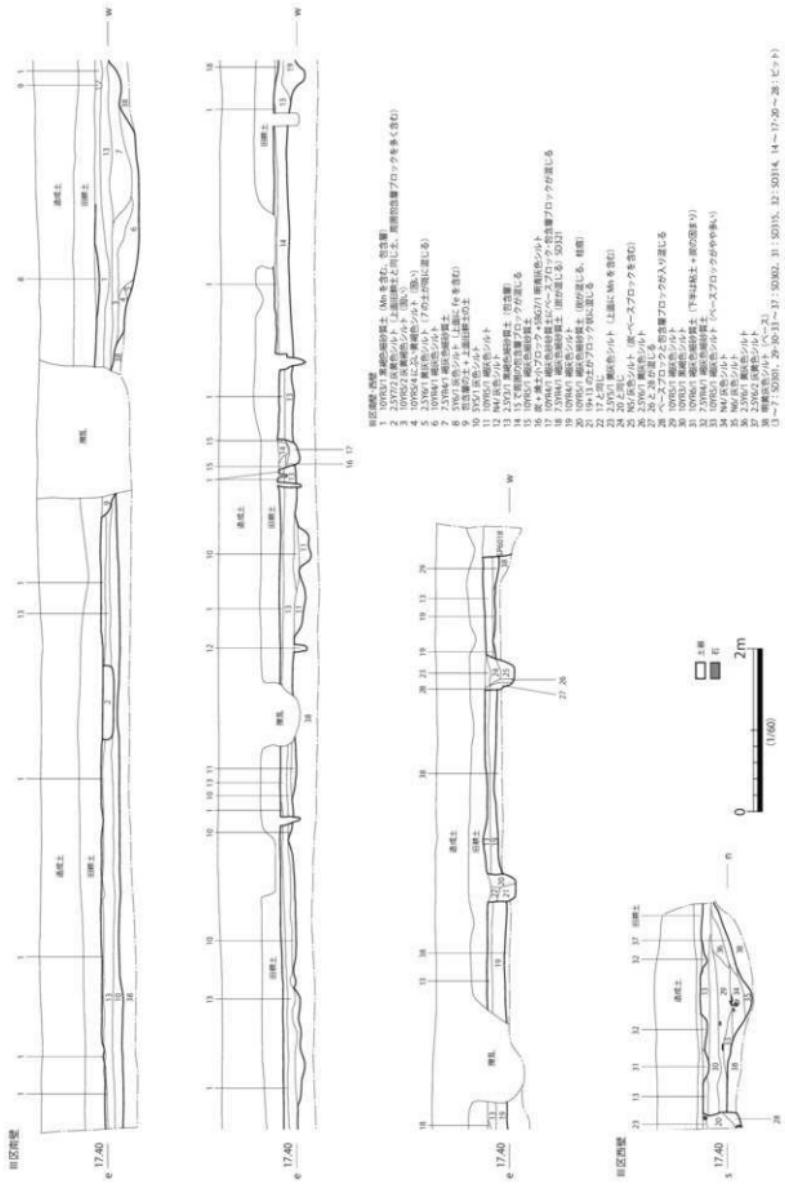
第6図 II区東壁断面図



第7図 II区北・南縁断面図

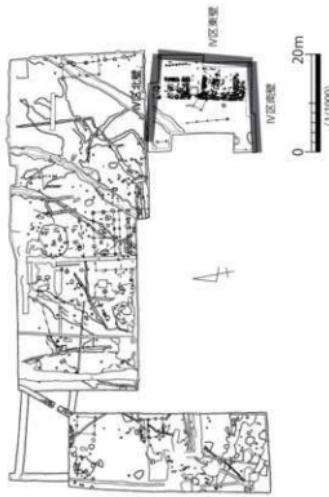
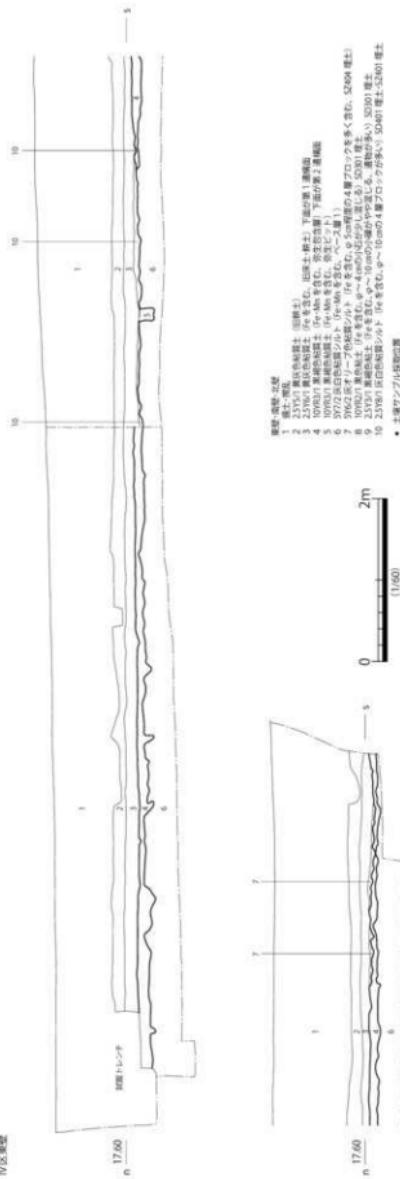
第8図 III区東壁断面図



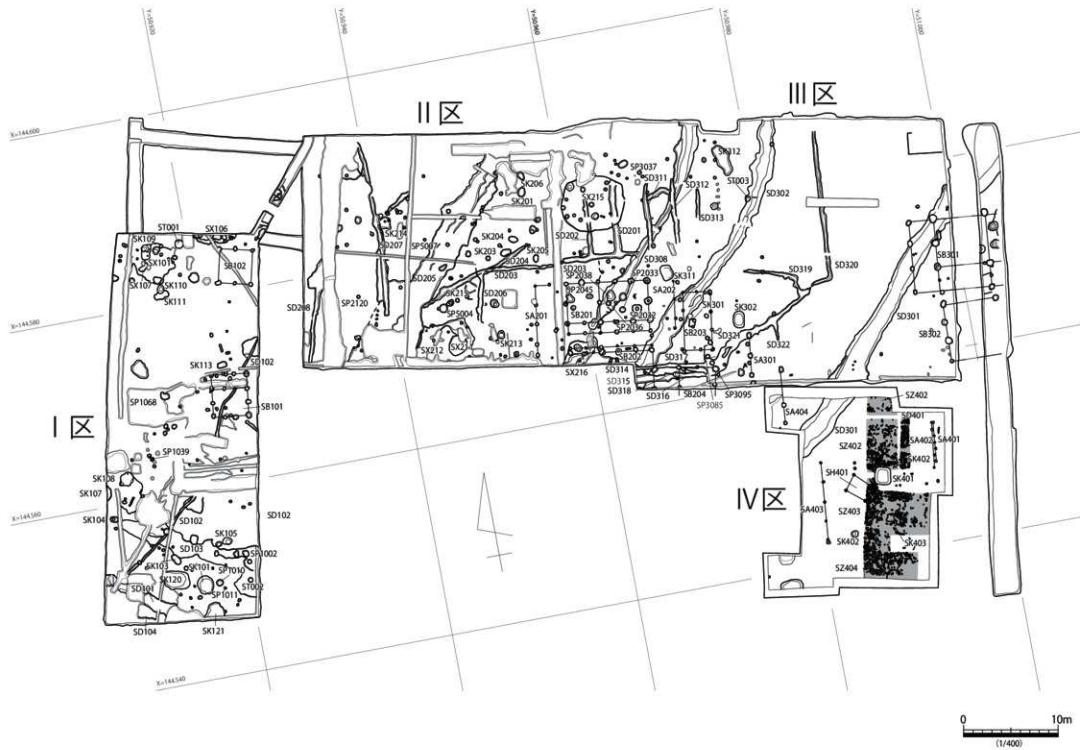


第9図 III区南・西壁断面図

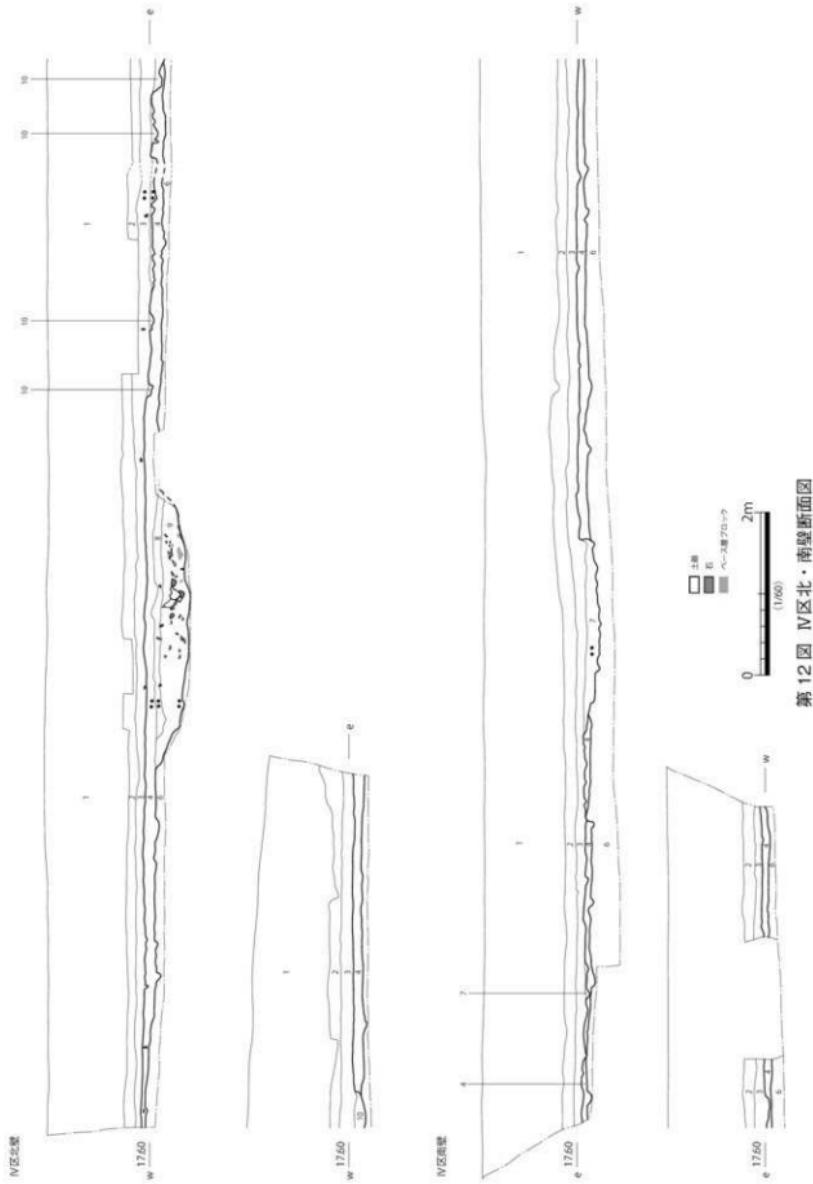
IV区東壁



第10図 IV区東壁断面図



第11図 遺構配置図



第12図 IV区北・南壁断面図

IV区（第10・12図）

土層堆積状況はⅢ区と概ね同じである。造成土・耕作土・床土の下部で黒褐色粘質土の遺物包含層が堆積し、その下部は灰白色粘質シルトのベースである。遺物包含層の上面が第1遺構面である古代以降の遺構面、ベースが第2遺構面である弥生時代の遺構面である。第1遺構面のレベルは17.45m、第2遺構面のレベルは17.40mで、東・北側ほど低い。

第3節 遺構・遺物

1. 弥生時代前期の遺構・遺物

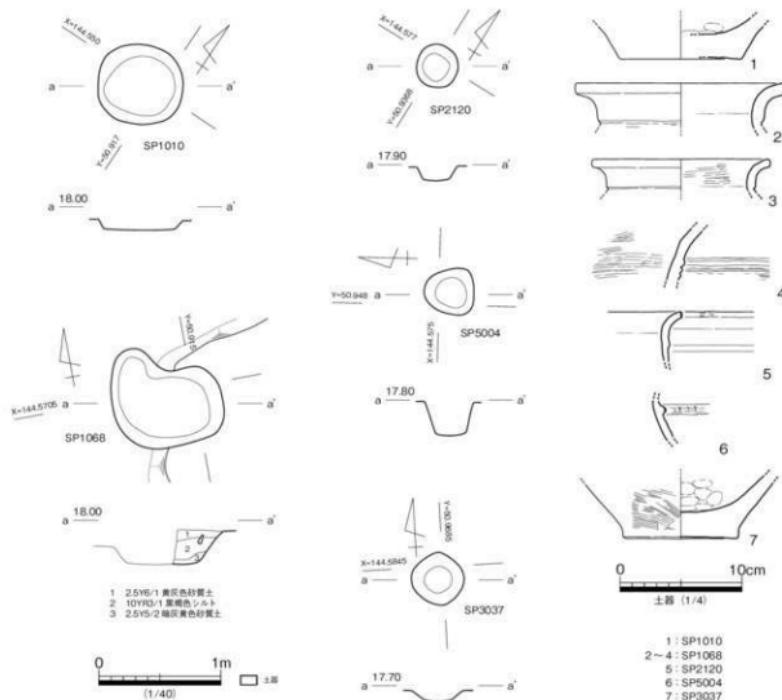
①ピット

SP1010(第13図)

I区東南部で検出した。円形で直径67.5cm、深さ9cm、埋土は褐色粘質土である。埋土中からは弥生土器が出土した。

1は弥生土器壺底部。弥生時代前期Ic期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ic期と考えられる。



第13図 弥生時代前期ピット 平・断面図、出土遺物

SP1068(第13図)

I区中央付近で検出した。隅丸方形で東北隅が凹む形状である。長軸90cm、短軸60cm、深さ24cmである。埋土はおもに黄灰色砂質土、黒褐色シルトである。埋土中からは弥生土器片が出土した。

2~4は弥生土器壺。2・3は頸部に段を有する。4は大型壺体部片。削出突帯を3条巡らせる。2・3は弥生時代前期I c期、4は弥生時代前期II a期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c~II a期と考えられる。

SP2120(第13図)

II区南西部で検出した。円形で直径35cm、深さ11cm、埋土は褐色粘質土である。埋土中からは弥生土器片が出土した。

5は弥生土器壺小片。口縁端部に刻み目を施し、体部に段を持つ。弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

SP5004(第13図)

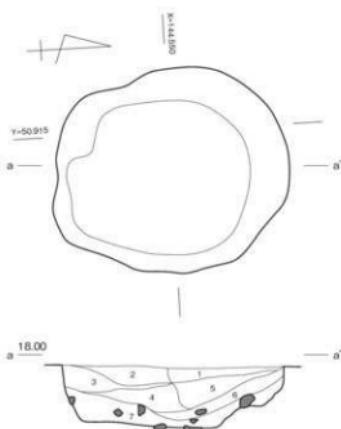
II区南部で検出した。円形で直径40cm、深さ32cmである。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

6は弥生土器壺小片。頸部に削出突帯を巡らせ、突帯には刻み目を施す。弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

SP3037(第13図)

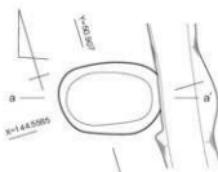
III区北西部で検出した。円形で直径45cm、深さ12cmである。埋土中からは弥生土器小片が出土し



- 1 BYNG-1 樹皮色砂質土
- 2 TOBGF-1 黒褐色砂質土
- 3 NOF-1 黑褐色砂質土(一部暗褐色の含金層ブロックを含む)
- 4 SGD-1 暗褐色砂質土(複数の含金層ブロックを多く含む)
- 5 TOYFG-6 黄褐色砂質土
- 6 TSYRG-2 黄褐色砂質土
- 7 KDF-1 黑褐色砂質土
- 8 KDF-2 黑褐色砂質土

0 1m
(1/40)

0 10cm
土器 (1/4)



- 1 TOYRS-2 暗褐色砂質土
- 2 TOYRS-6 明黄色シルト質土 (<--X)

0 1m
(1/40)

0 10cm
土器 (1/4)

第14図 SK101 平・断面図、出土遺物

第15図 SK104 平・断面図、出土遺物

た。

7は弥生土器壺底部。体部と底部の境の屈曲が強い。弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

②土坑

SK101(第14図)

I区南端付近で検出した土坑である。SD101(外環濠)とSD103(内環濠)の間に位置する。おおむね円形で、長軸1.98m、短軸1.62m、深さ49.3cmである。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

8は弥生土器壺底部。底部と体部の境の屈曲が強い。弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

SK104(第15図)

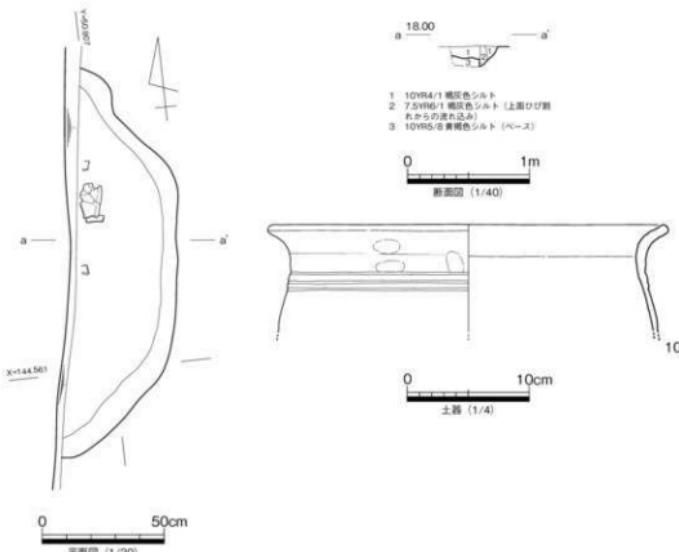
I区南西部で検出した土坑である。椭円形で長軸0.83m、短軸0.59m、深さ23.5cm、埋土は灰黄褐色細砂質土である。攪乱を挟んでSD103(内環濠)の延長部に位置し、遺構の時期もおおむね同じである。遺構の形状から別遺構としたが、SD103(内環濠)の延長部または、SD103に関わる遺構の可能性もある。埋土中からは弥生土器片が出土した。

9は弥生土器壺底部。底部と体部の境の屈曲は強い。弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

SK107(第16図)

I区南部西端で検出した土坑である。西側の大半は調査区外へ延びる。長軸1.63m以上、幅0.41m以



第16図 SK107 平・断面図、出土遺物

上、深さは16.8cm、埋土は褐灰色シルトである。SD103（内環濠）は調査区西部で二股に分流するが、その内側（北側）の延長部の位置に相当し、SD103に関わる遺構の可能性もある。埋土中からは弥生土器片が出土した。

10は弥生土器壺。如意状口縁に3条のヘラ描き沈線を巡らせる。摩滅が著しい。弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

SK109(第17図)

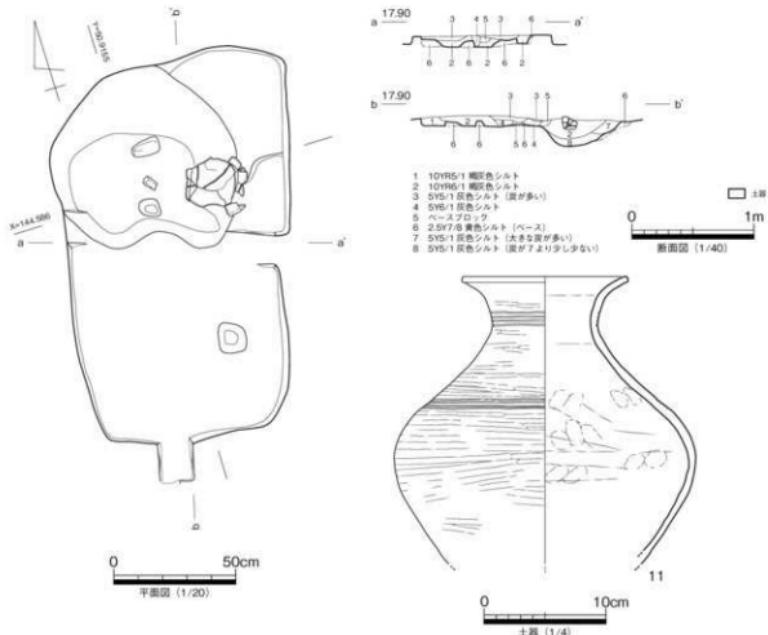
I 区北端部で検出した土坑である。当初、長方形の遺構として検出したが、北側の不整円形の部分が深く、土坑の本体はこの部分であろう。全体の規模は長軸1.57m、短軸0.87m、深さ8.6cm、不整円形部分は長軸0.77m、短軸0.67m、深さ20.1cmである。土坑の上部付近から、口縁部を南へ向けた状態で壺が出土した。上面の削平が著しく壺は1/2程度しか残されていない。埋土は褐灰色シルトで土坑の底部には炭混りの灰色シルトが堆積する。

11は弥生土器壺。頸部に4条、体部上半に2条のヘラ描き沈線を施す。外面はほぼ全面をヘラミガキで調整する。弥生時代前期II a期。

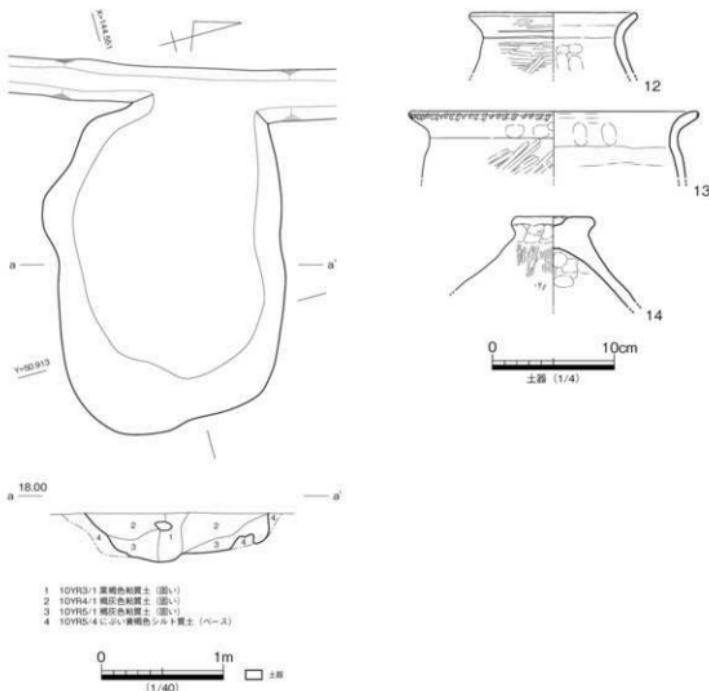
遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期II a期と考えられる。

SK120(第18図)

I 区南部で検出した土坑である。SD101（外環濠）とSD103（内環濠）の間、SK101の西側で検出し



第17図 SK109 平・断面図、出土遺物



第18図 SK120 平・断面図、出土遺物

た。西端は攪乱により消失する。楕円形で長軸2.94m、短軸1.93m、深さ40.4cm、埋土はおおむね褐灰色粘土である。埋土中からは弥生土器が出土した。

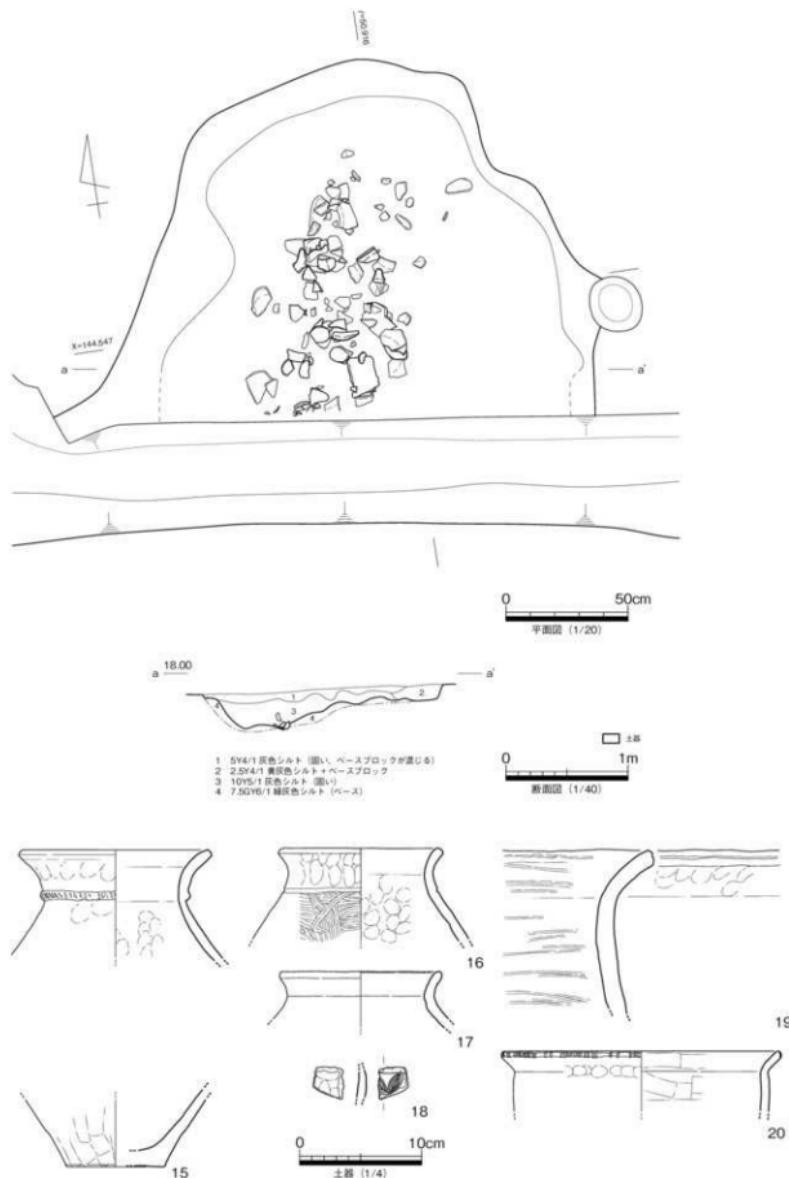
12～14は弥生土器である。12は壺。頭部に2条のヘラ描き沈線を巡らせ、屈曲部は段を有する。13は甕。頭部は指押さえにより強く窪み、口縁部外側に刻み目を施す。14は甕の蓋。頭部はやや窪ませる。いずれも弥生時代前期Ic期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ic期と考えられる。

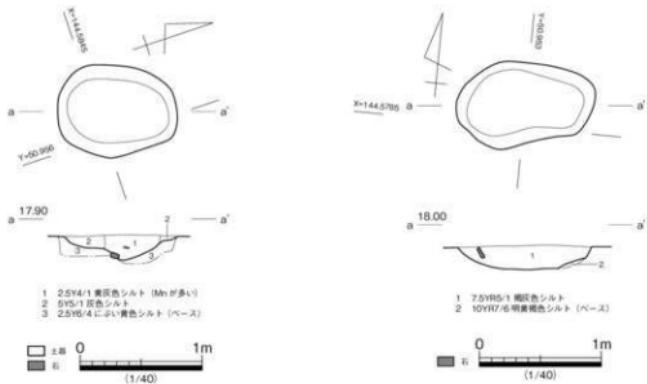
SK121(第19図)

I区南端で検出した土坑である。南半は調査区外へ延びる。長軸2.14m以上、短軸1.50m以上、深さ28.7cmで埋土はおおね灰色シルトでよく締まる。SD101(外環濠)の攪乱を挟んだ延長部から検出した。SD103の東端拡張部分に相対する位置関係でもある。土坑内からは弥生土器が底から若干の埋土を挟んで廃棄された状態で出土した。

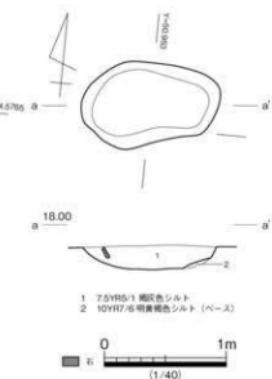
15～20は弥生土器である。15～19は壺。15は頭部に1条の削出突帯を巡らせ、突帯上には刻み目を施す。底部は、直接接合はしないが、胎土や色調、法量から同一個体として図化した。16は頭部か



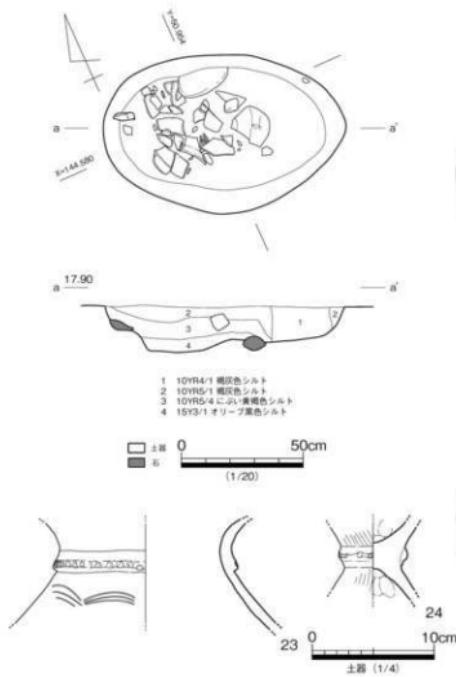
第19図 SK121 平・断面図、出土遺物



第20図 SK201 平・断面図



第21図 SK203 平・断面図



第22図 SK204 平・断面図、出土遺物

らやや下がった場所でヘラ書き沈線が1条巡る。ヘラ書き沈線の部分でわずかに段を有する。18は壺小片。有軸木の葉文を描く。19は大型壺口縁部。口縁端部にヘラ書き沈線を施す。20は壺。如意状口縁を呈し、口縁端部外面に刻み目を施す。いずれも弥生時代前期I c期。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期I c期と考えられる。

SK201(第20図)

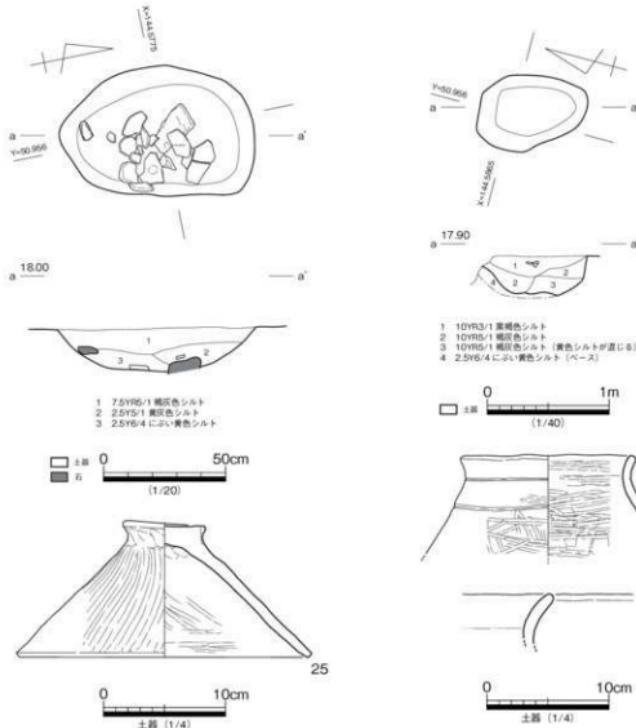
II区北部で検出した土坑である。SK206の約0.5m南側に位置する。楕円形で長軸0.98m、短軸0.75m、深さ20cmである。埋土中からは弥生時代前期と考えられる弥生土器壺底部小片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期と考えられる。

SK203(第21図)

II区中央部付近で検出した土坑である。SK204の南西約0.8mの位置にある。楕円形で長軸1.18m、短軸0.7m、深さ20cm、埋土は褐灰色シルトである。埋土中からは、弥生時代前期と考えられる土器小片とサスカイト剥片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期と考えられる。



第23図 SK205 平・断面図、出土遺物

第24図 SK206 平・断面図、出土遺物

SK204(第22図)

II区中央付近で検出した土坑である。楕円形で長軸1.03m、短軸0.75m、深さ18.7cmである。土坑の上面付近からは弥生土器や礫が廃棄された状態で出土した他、サスカイト片が出土した。

21～24は弥生土器である。21～23は壺。21は頸部に縦い段を持つ。22は体部上半に段状を呈するヘラ描き沈線を巡らせ、その下部1ヶ所に退化した有輪木の葉文を描く。ほぼ完形。23は頸部に刻み目を持つ削出突帯を巡らせ、体部に連弧文を描く。摩滅が著しい。24は高杯型土器。屈曲部に刻み目突帯を巡らせる。概ね弥生時代前期Ic期の遺物と考えられる。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ic期と考えられる。

SK205(第23図)

II区中央付近、SK203の東2.5m付近で検出した土坑である。楕円形で長軸0.85m、短軸0.6m、深さ17.9cmである。規模形状ともSK204に似る。おもに埋土上部から弥生土器が廃棄された状態で出土した他、サスカイト片が出土した。

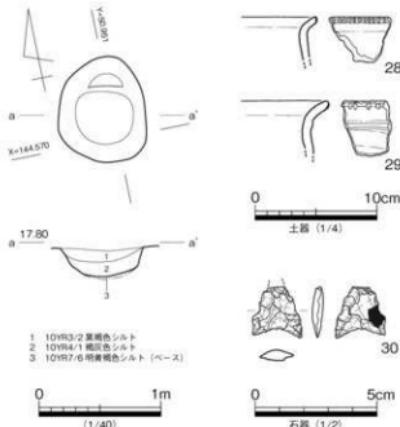
25は弥生土器壺の蓋。頂部はほぼ平らである。内外面とも丁寧に磨く。弥生時代前期Ic期の遺物と考えられる。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ic期と考えられる。

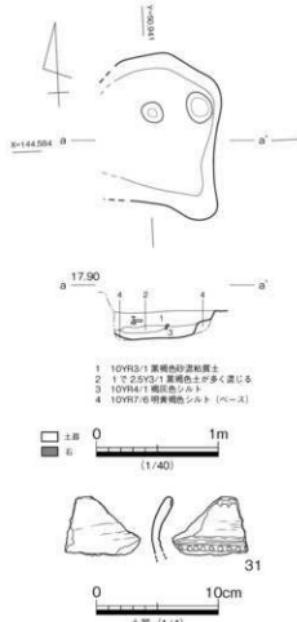
SK206(第24図)

II区中央北部で検出した土坑である。楕円形で長軸0.85m、短軸0.63m、深さ31.9cmである。埋土は黒褐色シルト、褐灰色シルトである。埋土中からは弥生土器、サスカイト片が出土した。

26・27ともに弥生土器である。26は壺。頸部にヘラ描き沈線、体部上半に段状を呈するヘラ描き沈線を巡らせ。27は壺口縁部小片。摩滅が著しい。弥生時代前期Ic期の遺物と考えられる。



第25図 SK213 平・断面図、出土遺物

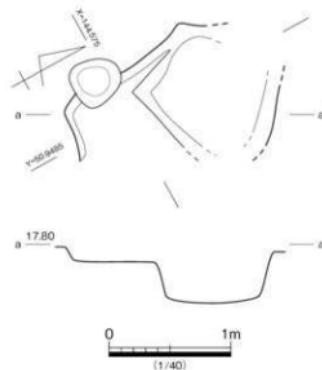


第26図 SK214 平・断面図、出土遺物

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ⅰc期と考えられる。

SK213(第25図)

II区中央南部で検出した土坑である。楕円形で長軸0.86m、短軸0.7m、深さ21.7cmである。北側が1段高い。埋土は上層が黒褐色シルト、下層は褐灰色シルトである。埋土中からは弥生土器小片が出土した。



28・29は弥生土器甕。ともに如意状口縁で口縁端部外側に刻み目を持つ。29は頸部付近に段を持つ。弥生時代前期Ⅰc期の遺物と考えられる。

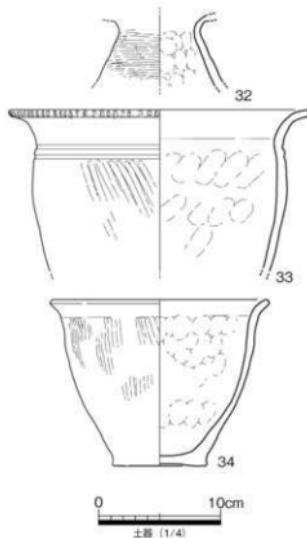
30はサヌカイト製打製石鎌。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ⅰc期と考えられる。

SK214(第26図)

II区西部で検出した土坑である。SD207により一部が消失する。不整円形で長軸1.45m、短軸1m以上、深さ22.1cmである。埋土は上部が黒褐色砂混粘質土、下部が褐灰色シルトである。埋土中からは弥生土器、サヌカイト片が出土した。

31は大型壺口縁部。口縁端部外側に刻み目を持つ。頸部にヘラ描き沈線を2条巡らせ、その下部に竹管文を施す。弥生時代前期Ⅱa期。



第27図 SK215 平・断面図、出土遺物

第28図 SK311 平・断面図、出土遺物

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期IIa期と考えられる。

SK215(第27図)

II区南部で検出した土坑である。北側一部はSD204により、南東部はSD206により消失する。方形に近い不整形で、南側はテラス状で浅く、土坑の本体は北側である。長軸1.7m、短軸1.2m、深さ46.0cm、テラス状の深い部分の深さは5cmである。埋土中からは弥生土器とともにサヌカイト片がやや多く出土した。

32～34は弥生土器である。32は壺頸部。33は甕。如意状口縁で口縁端部外側に刻み目を施し、ヘラ描き沈線を2条巡らせる。34は鉢。底部にイネと考えられる圧痕が多数残る。いずれも弥生時代前期IIa期と考えられる。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期IIa期と考えられる。

SK311(第28図)

III区中央付近で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.63m、短軸1.20m、深さ32.0cm、埋土は上部が黄灰色シルト、下部がオリーブ黒色シルトである。埋土中からは弥生時代前期と考えられる土器小片、サヌカイト剥片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期と考えられる。

③性格不明遺構

SX211・SX212(第29図～第34図)

II区西南部で検出した不整形の遺構である。別遺構として調査をしたが、SX212の中の遺物集中部分をSX211としたもので、土層断面からは両者は同じ遺構と考えられる。

SX211は楕円形の土器・碟集中部分である。楕円形の範囲で、長軸2m程度、短軸1.93m、深さ10cm程度である。埋土中からは弥生土器、碟、サヌカイト片が集中して出土した。

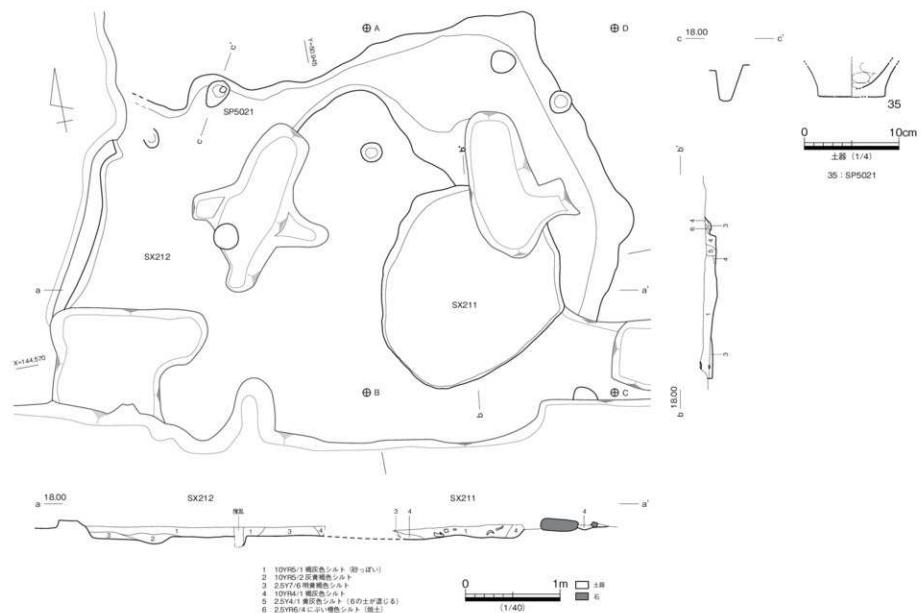
SX212はSX211を含む不整形の落ち込みである。南半部分は調査区外へ延びる。1辺5.5m程度で、北東側は溝状に落ち込む。溝状に落ち込む部分を中心に弥生土器、碟、サヌカイト片などが出土した。サヌカイト片は相当量出土しており、サヌカイトに関わる作業をしたことも想定されよう。

SP5021はSX212内で検出したピットである。楕円形で長軸30cm、短軸21cm、深さ32.0cmである。埋土中からは弥生土器底部が出土した。SX212に伴うピットとも考えられる。

35はSP5021から出土した。弥生土器甕底部。弥生時代前期Ic期。

36～47・619・620は土器集中部分であるSX211部分で出土した遺物である。36～46は弥生土器。36～42は壺。36は頭部下端から体部上部にかけて削り出し、37は頭部下端を削り出すことにより段を持つ。37・38は体部上半部に2条のヘラ描き沈線を施す。39は大型壺。頭部に段を持ち、段の直上にも沈線を巡らせる。40～42は壺底部。40・42は底部外面に、41は体部下半に種子圧痕が残る。43～45は甕。43は屈曲する頭部で緩く聞く如意状の口縁部を持ち、頭部に3条のヘラ描き沈線を施す。44は口縁部外側に刻み目を施し、頭部に沈線を1条巡らせる。45は頭部に2条のヘラ描き沈線を巡らせ、沈線の間に竹管文を巡らせる。下側の沈線は段状を呈する。46は甕底部。焼成後穿孔する。47はサヌカイト製打製スクレイパー。619・620は台石である。619は4面に摩滅痕があり、全体に敲打痕を残す。特に表面は摩滅が著しい。表・裏面には幅1.5～2cm、長さ5～20cm程度の溝状の窪みが9ヶ所に残る。620は偏平な形状で、表・裏面の中央部付近に摩滅痕を残す。

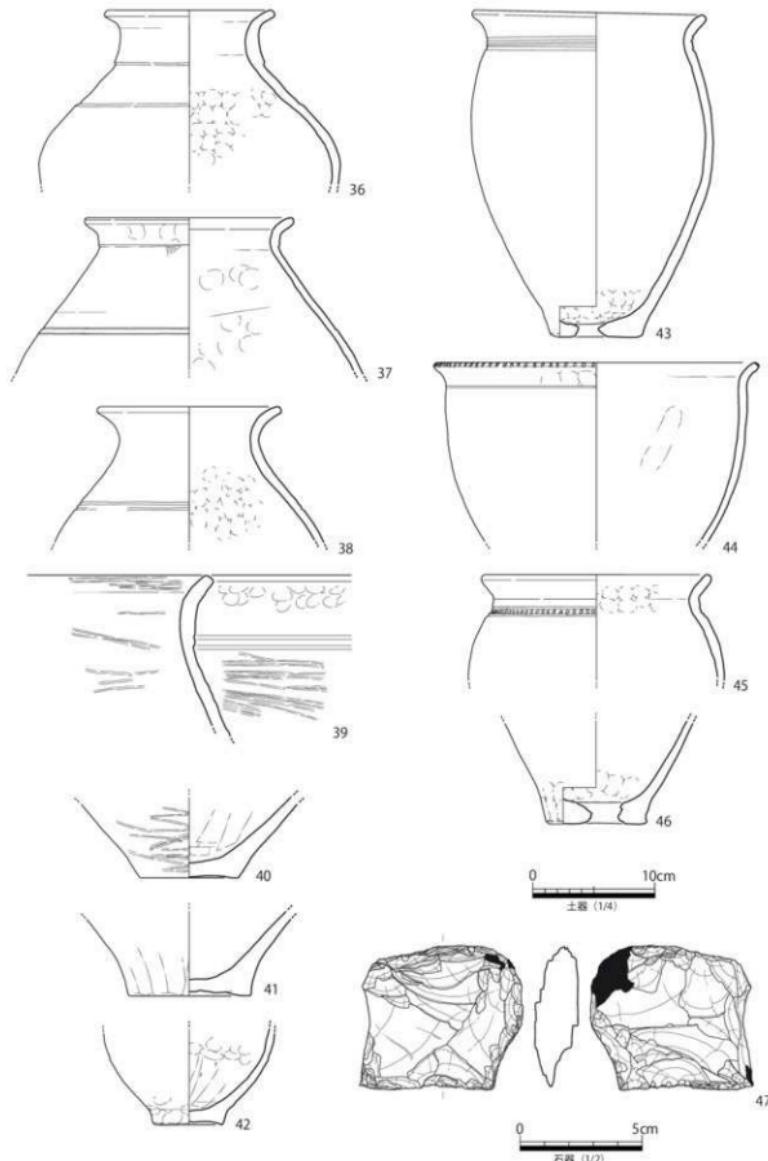
出土遺物はおおむね弥生時代前期Ic期のものであり、遺構の時期は弥生時代前期Ic期と考えら



第29図 SX211・SX212 平・断面図、出土遺物



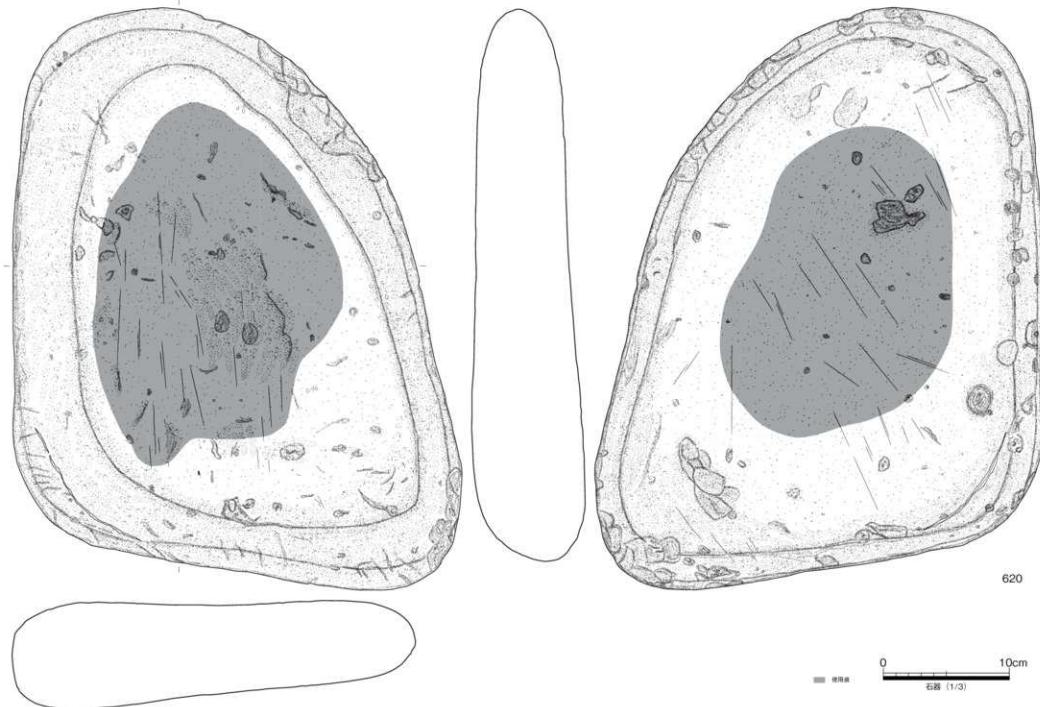
第30図 SX211 遺物出土状況



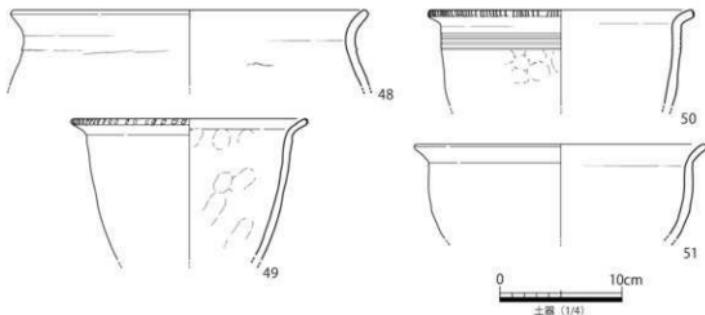
第31図 SX211 出土遺物(1)



第32図 SX211 出土遺物 (2)



第33図 SX211 出土遺物(3)



第34図 SX212 出土遺物

れる。

48～51はSX212から出土した弥生土器である。48は壺。頸部に板状工具を押し付け段を作る。49・50は甕。いずれも如意状口縁で、口縁端部に刻み目を施す。50は体部に4条のヘラ描き沈線を施す。51は鉢。

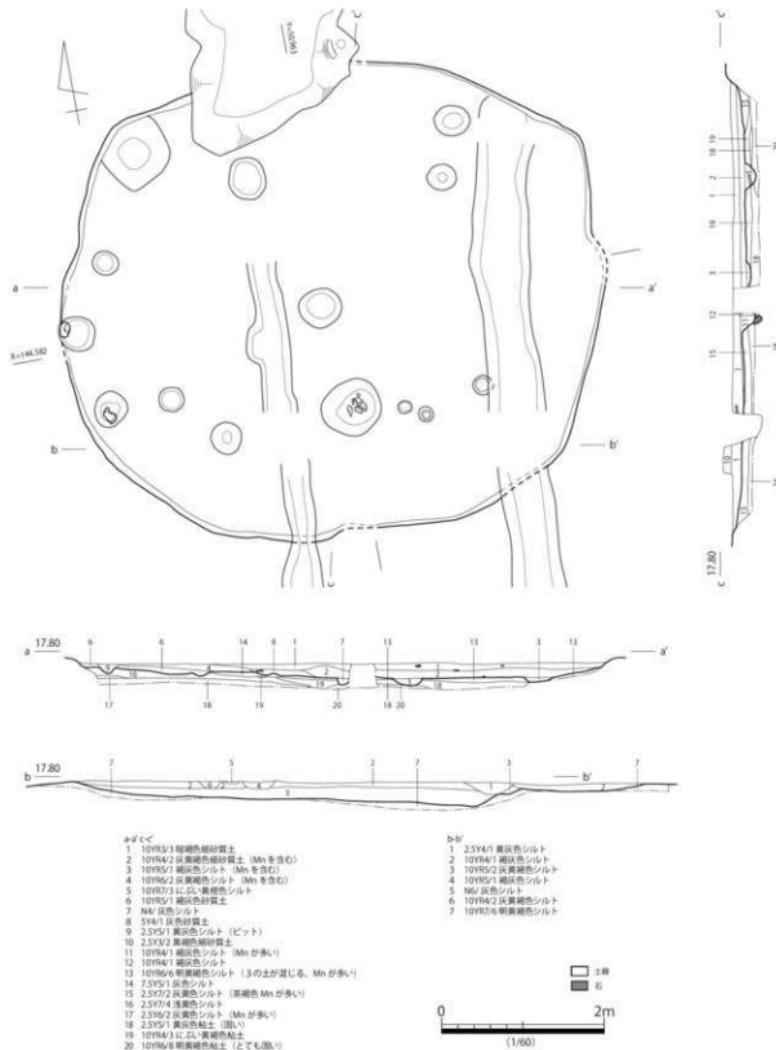
出土遺物はおおむね弥生時代前期Ic期であり、遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ic期と考えられる。

SX215(第35図～第37図)

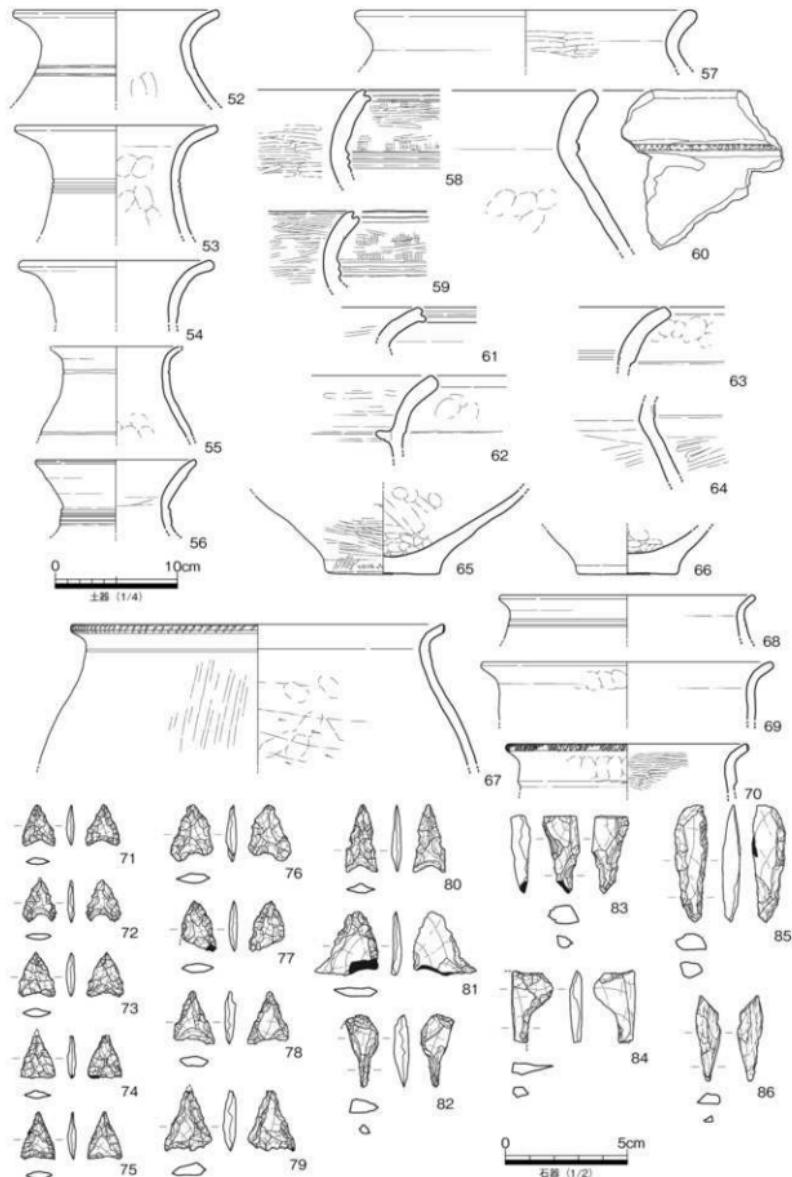
II区北東部で検出した円形の遺構である。長軸6.7m、短軸5.7m、深さ36cmである。規模・形状から堅穴建物の可能性もあると考えられるが、遺構内から複数の柱穴を検出したものの、主柱穴やその他堅穴建物に付属すると考えられる遺構は検出できなかった。遺構内からは弥生土器とともにサヌカイト製打製石鏡・石錐やそれらの未成品、その他多量のサヌカイト片が出土した。遺構内で石鏡、石錐等のサヌカイト製品の製作に携わっていた可能性があろう。

52～70は弥生土器。52～66は壺。52・53・55は頸部、体部に2条～3条のヘラ描き沈線を、56は削出突带上に3条の沈線を施す。58～64は大型壺。58・59は直接接合せず頸部の屈曲の度合いもやや異なるため個別に図化したが、胎土や色調は類似し、同一個体の可能性が高い。口縁端部に沈線、頸部に2条の削出突帯を巡らせる。60は頸部に刻み目のある削出突帯を巡らせる。62は内面に貼付突帯を、外面には段を付ける。63は頸部に、64は頸部と体部の境に段を付ける。65・66は壺底部。いずれも底部と体部の境の屈曲が強い。67～70は甕。67は頸部に1条のヘラ描き沈線、口縁端部に刻み目を施す。68は頸部直下に2条のヘラガキ沈線を施す。70は頸部下部に板状の工具を押し当てて段を作る。板の単位が観察できる。口縁端部には刻み目を施す。

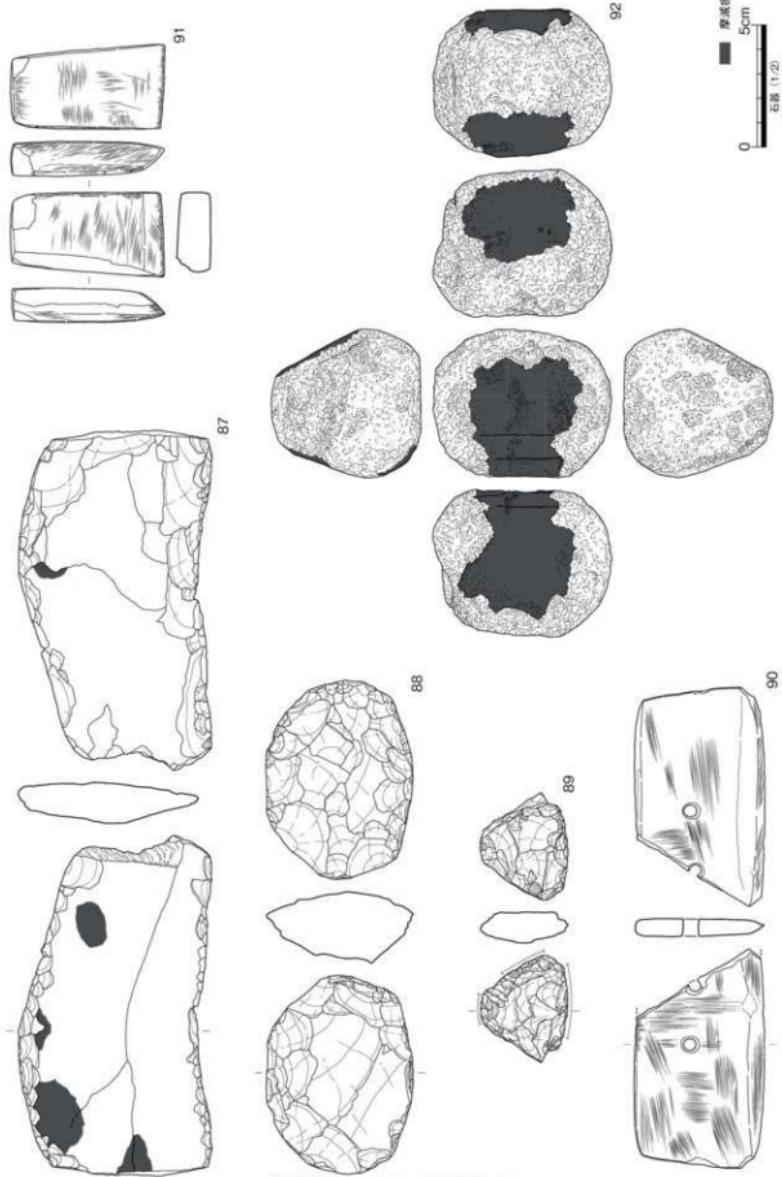
71～80はサヌカイト製打製石鏡。71～73、76、78、80は凹基式、74、75は平基式で長さは1.65～2.75cmである。81は三角形の形状で、縁部の半分程度に加工がある。石鏡または石錐の未製品と考えられる。82～85は石錐である。82は片側の側縁部、83は上部と片側の側縁部が欠損する。84は基部と片側の側縁部が欠損し、他の部分も加工が不十分である。86は側縁部にわずかに加工痕がある。86は結晶片岩製、他はサヌカイト製である。87は石庖丁とした。一部に摩滅痕がある。安山岩製。88・89は



第35図 SX215 平・断面図



第36図 SX215 出土遺物(1)



第37図 SX215 出土遺物(2)

石核。サヌカイト製。89は上・下部に潰れがみられる。90は磨製石庵丁。91は扁平片刃石斧。92は叩き石。下部に敲打痕を残すほか側縁に帯状に摩滅痕が残る。砂岩製。

遺物の時期はおおむね弥生時代前期Ⅰc期と考えられるが、頭部に削出突帯を巡らせる56・58・59など弥生時代前期Ⅱa期に下るものも含まれる。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ⅰc期～Ⅱa期と考えられる。

SX216(第38図・第39図)

II区南東隅で検出した遺構である。SD308(内環濠)の約0.8m南側に位置する。南北2.7m以上、東西4.1m程度の不整形を呈し、浅い部分は深さ8cm程度であるが、SX216の西から1.3～2.2m付近は溝状を呈し、深さ45～50cmを測る。SX216北端には、西半部が攪乱により大きく消失するものの、長軸1.82m程度、短軸1m程度、深さ30cm程度の掘り込みがあり、北向きに横倒しの状態で壺が埋納されていた。

上記溝状を呈する部分とSD308(内環濠)の南端は向き合う位置にあり、この間の空閑地は内環濠の陸橋部分となる。内環濠が途切れた部分に壺を埋納したものと考えられる。土坑中からは弥生土器壺が攪乱により半分消失した状態で出土したほか、弥生土器片、サヌカイト片などが出土した。

93～97は弥生土器。93～95は壺。93は頭部、体部上半、体部中央に2～3条の刻目突帯が巡る。胎土中に摩滅した黒色粒を多量に含む。形態・胎土から在地の土器ではなく南四国からの搬入品と考えられる。94は頭部に4条のヘラ描き沈線を、95は段状を呈する沈線を巡らせる。96・97は壺。ともに口縁端部に刻目を施し、96は3条のヘラ描き沈線を施す。98は叩き石。サヌカイト製。敲打により丸く成形する。剥離面が明瞭に残る部分もある。側面にはば等間隔に3ヶ所摩滅痕が残る。

93・94は弥生時代前期Ⅱa期まで下るが、その他は弥生時代前期Ⅰc期と考えられる。

溝状を呈する部分はSD308(内環濠)の一部とすれば前期Ⅰc期である。埋納された壺(93)がSD308の下限を示すものであれば、溝の廃絶に伴う行為の可能性もある。

④溝

SD204(第40図)

II区中央付近で検出した溝である。SD205付近から検出し、12mほどで途切れる。幅35cm、深さ7cm、埋土は黒褐色シルトである。SD204の延長上にSD308(内環濠)の北から約7.6mの位置でわずかに派生する西方向の延長約3.2mの溝があり、同一遺構の可能性もある。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片などが出土した。

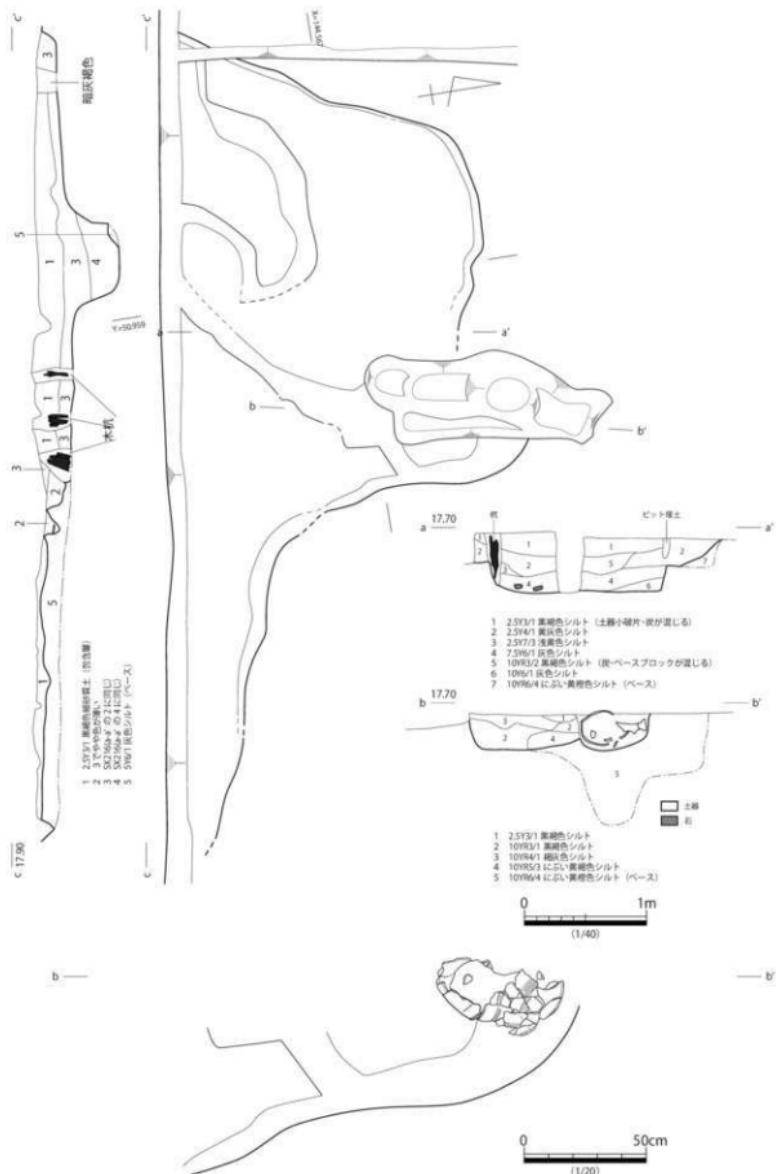
99は弥生土器壺。頭部には段状を呈するヘラ描き沈線を1条巡らせる。弥生時代前期Ⅰc期と考えられる。100は楔形石器。上部・下部の側縁部に敲打痕が認められる。サヌカイト製。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期Ⅰc期と考えられる。

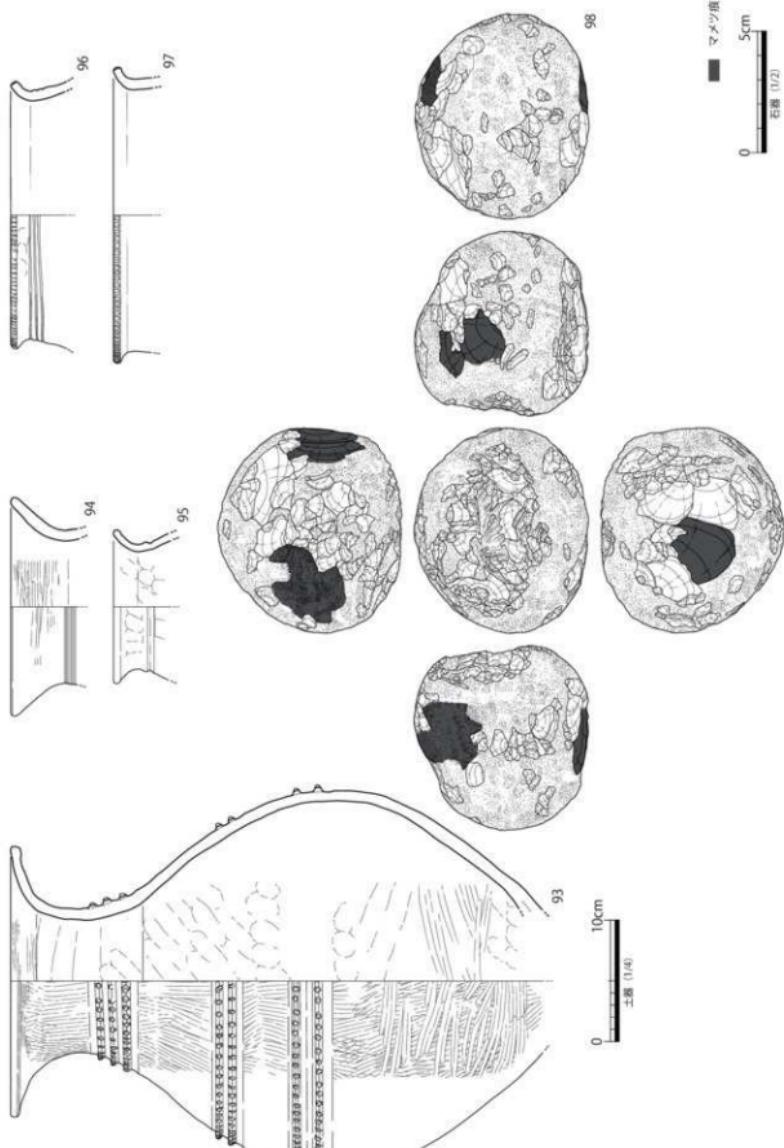
SD208(第41図)

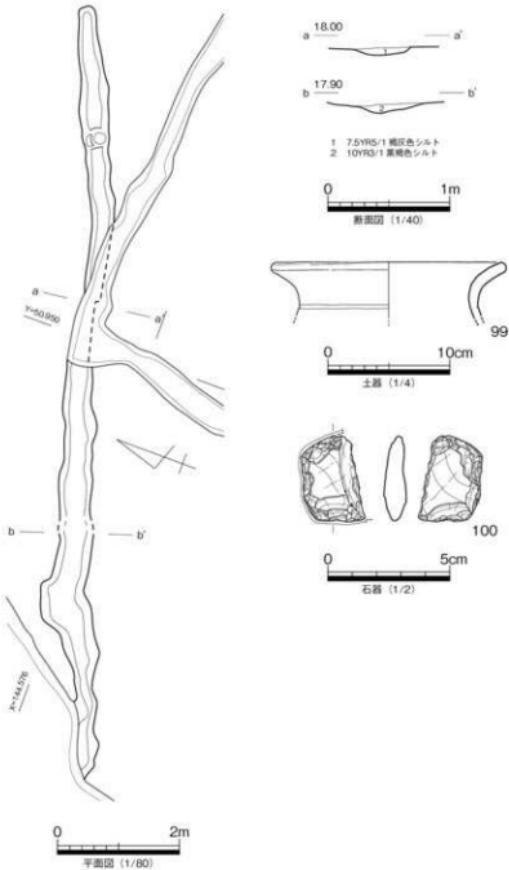
II区西端で検出した溝である。ほぼ直線的に延び、北端付近でやや広くなり、攪乱により消失する。攪乱より東では検出していない。検出長約10m、幅35～48cm、深さ12cm、埋土はおおむね褐灰色シルトである。包含層である黒色粘土が上面に堆積する。埋土中からは弥生土器片やサヌカイト片が出土した。

101は弥生土器壺。頭部に3条のヘラ描き沈線を巡らせる。弥生時代前期Ⅰc期。102～105はサヌ

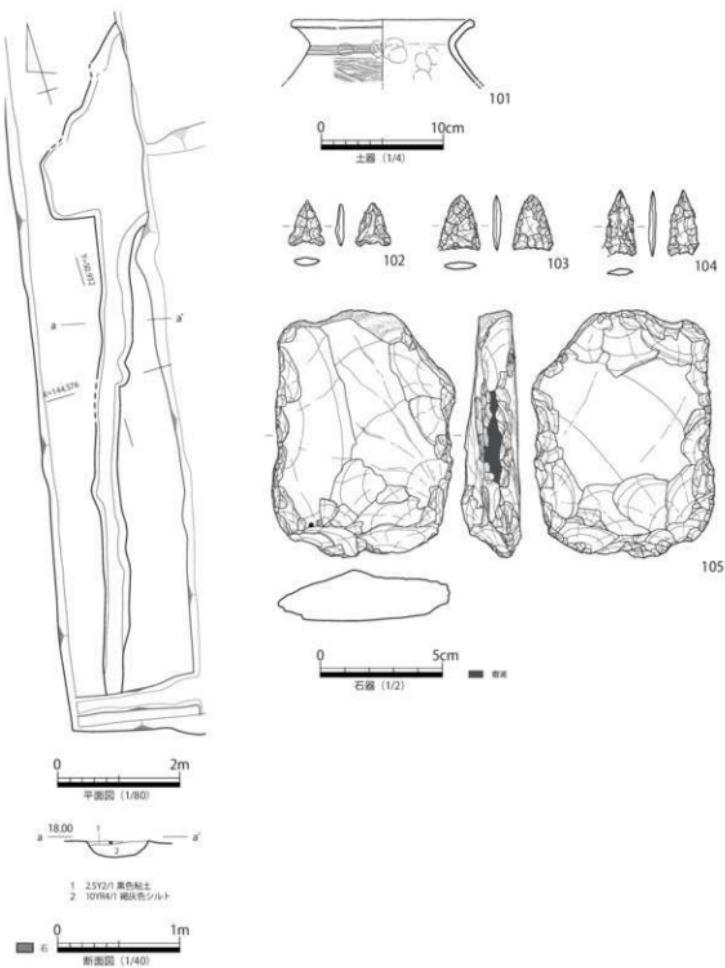


第38図 SX216 平・断面図





第40図 SD204 平・断面図、出土遺物



第41図 SD208 平・断面図、出土遺物

カイト製打製石器。102～104は石鏃。102・104は凹基式、103は平基式である。105は打製石斧。側縁の刃部には摩滅痕が残る。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期 I c 期と考えられる。

SD101・SD302（外環濠）（第42図～第47図）

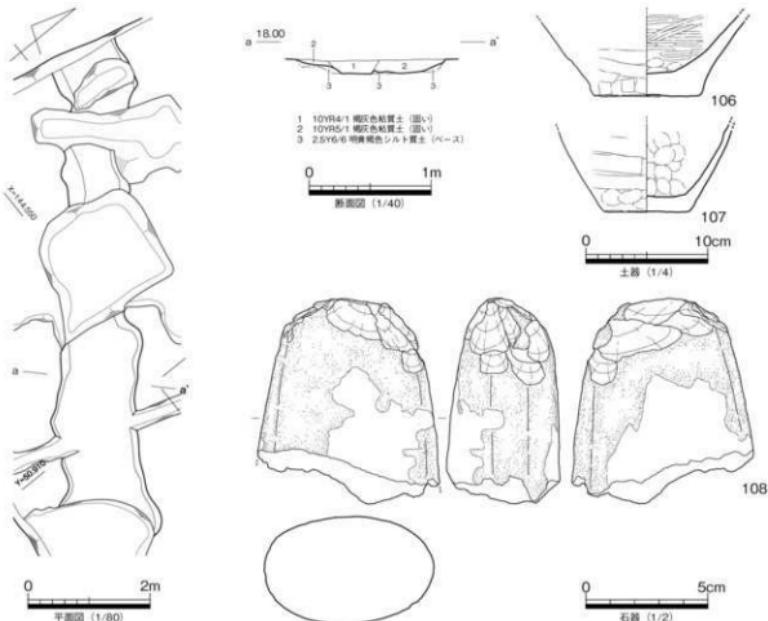
I 区南端で SD101 を、III 区西部で SD302 を検出した。両者は同一の溝と考えられる。

SD101 は、攪乱により断続的に消失しながら延長 7.3m を検出した。幅 115～125cm、深さ 10.6cm、埋土は褐灰色粘質土でよく締まる。

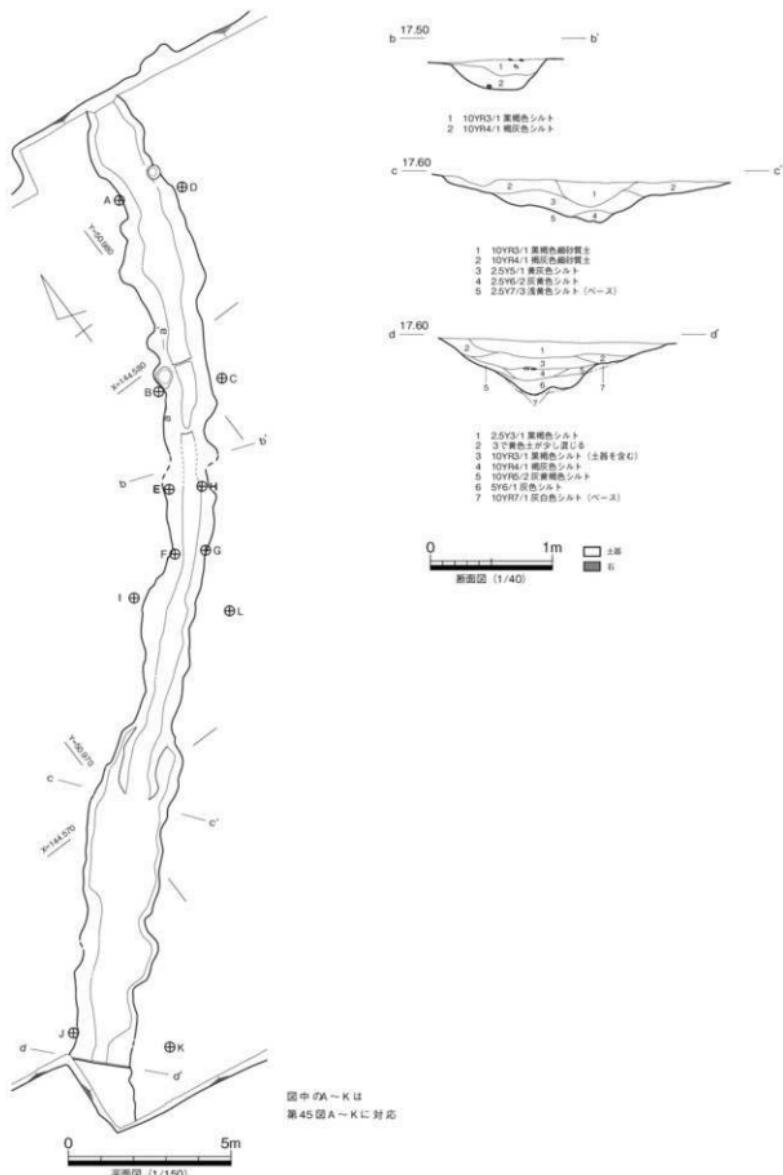
SD302 は III 区西部で検出した。検出長 6.25m、幅 185～235cm、深さ 25～45cm で、埋土は上部が黒褐色シルト、下部が褐灰色シルトである。両者は二重環濠の外環濠の一端と考えられる。内環濠である SD103・SD308 の場合と同様、東部 SD302 からは多くの遺物が出土し、西南部 SD101 からの出土遺物は少なかった。溝底のレベルは南西側（SD101）が高く北東側（SD302）が低い。

106～108 は SD101 から出土した遺物である。106・107 は弥生土器壺底部。106 は底部外面に穀類と考えられる種実圧痕が観察できる。108 は磨製石斧。下部は欠損する。砂岩。

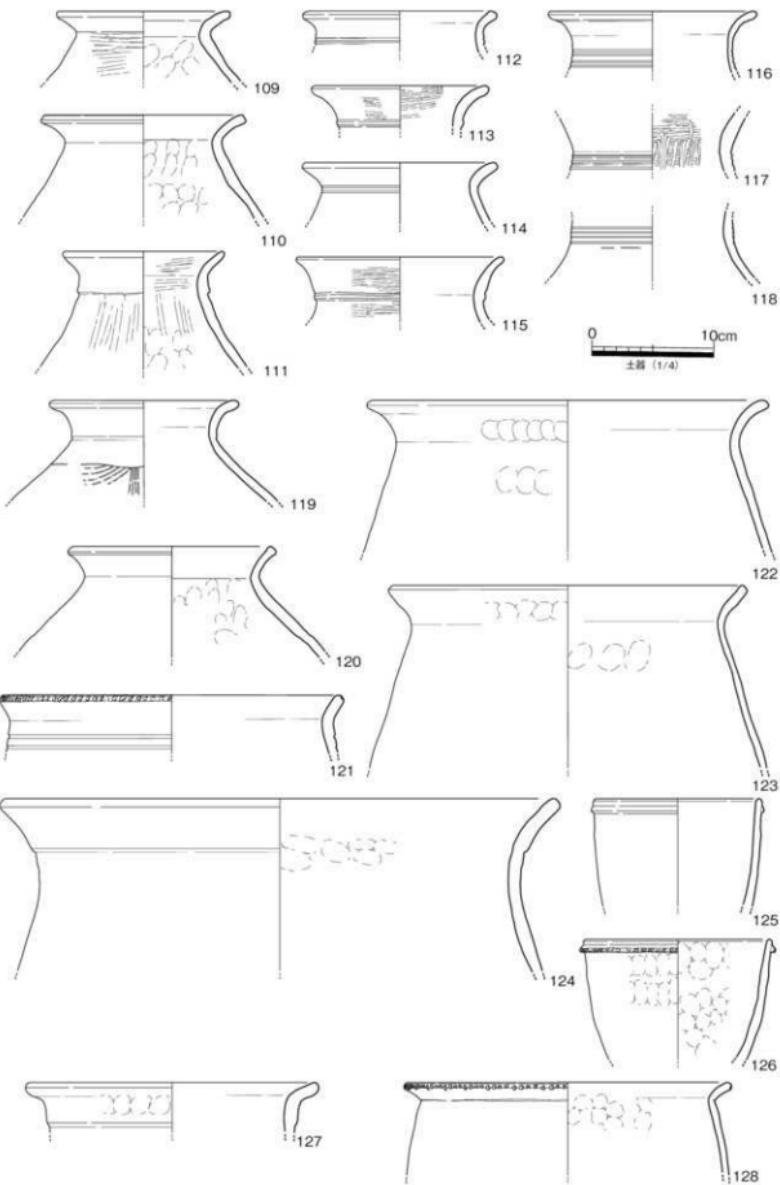
109～157 は SD302 から出土した遺物である。109～156 は弥生土器。109～124 は壺。111 は頸部直下に板状の工具を連続的に横方向に押し当てて段を作る。112・114・116・118 は頸部に 2～4 条のヘラ描き沈線を、113・115 は削出突帯を巡らせる。117 は頸部の削出突帯上にヘラ描き沈線を 2 条施す。119 は頸部下部を削り出し、段を作る。胴部に連弧文と直線文のヘラ描き文様を施す。121 は口縁端部に刻



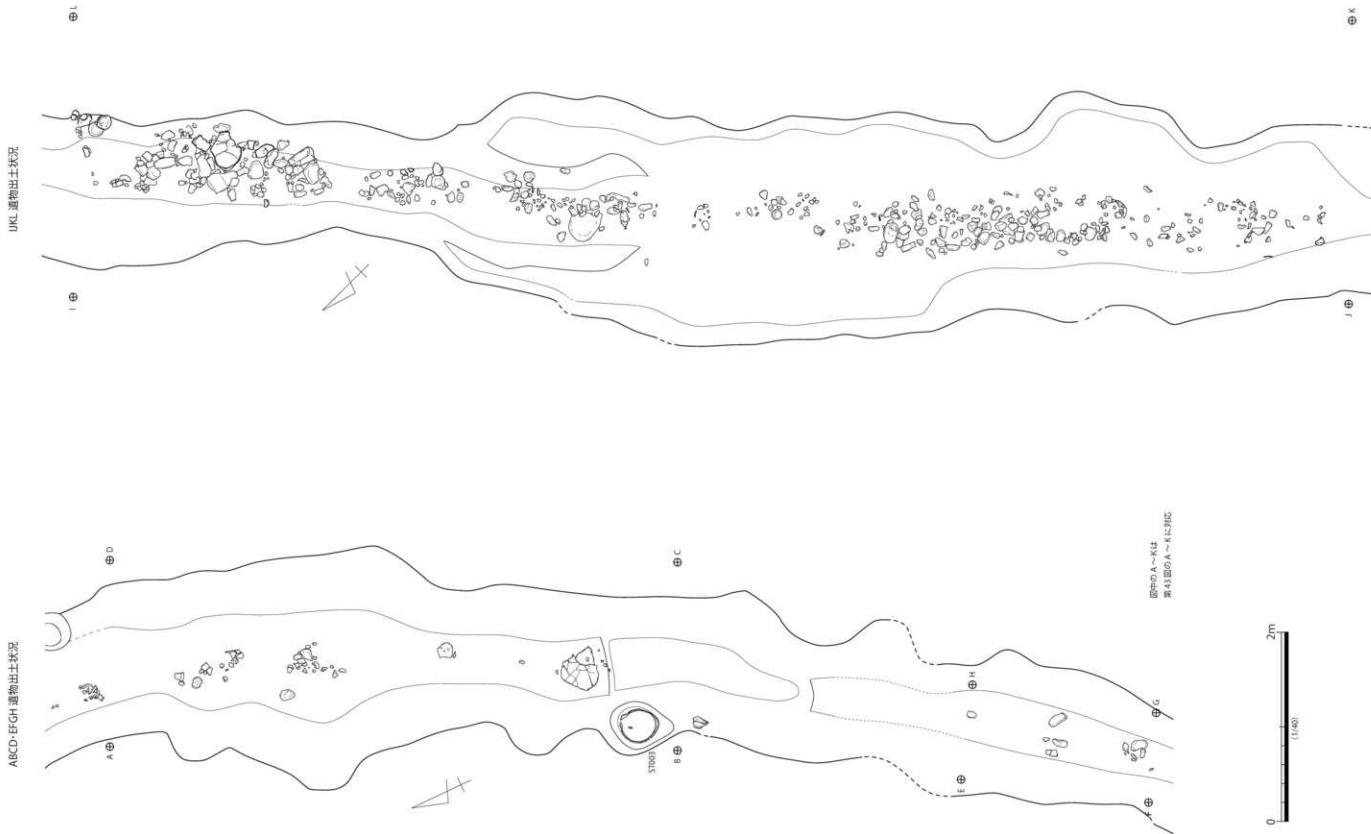
第42図 SD101 平・断面図、出土遺物



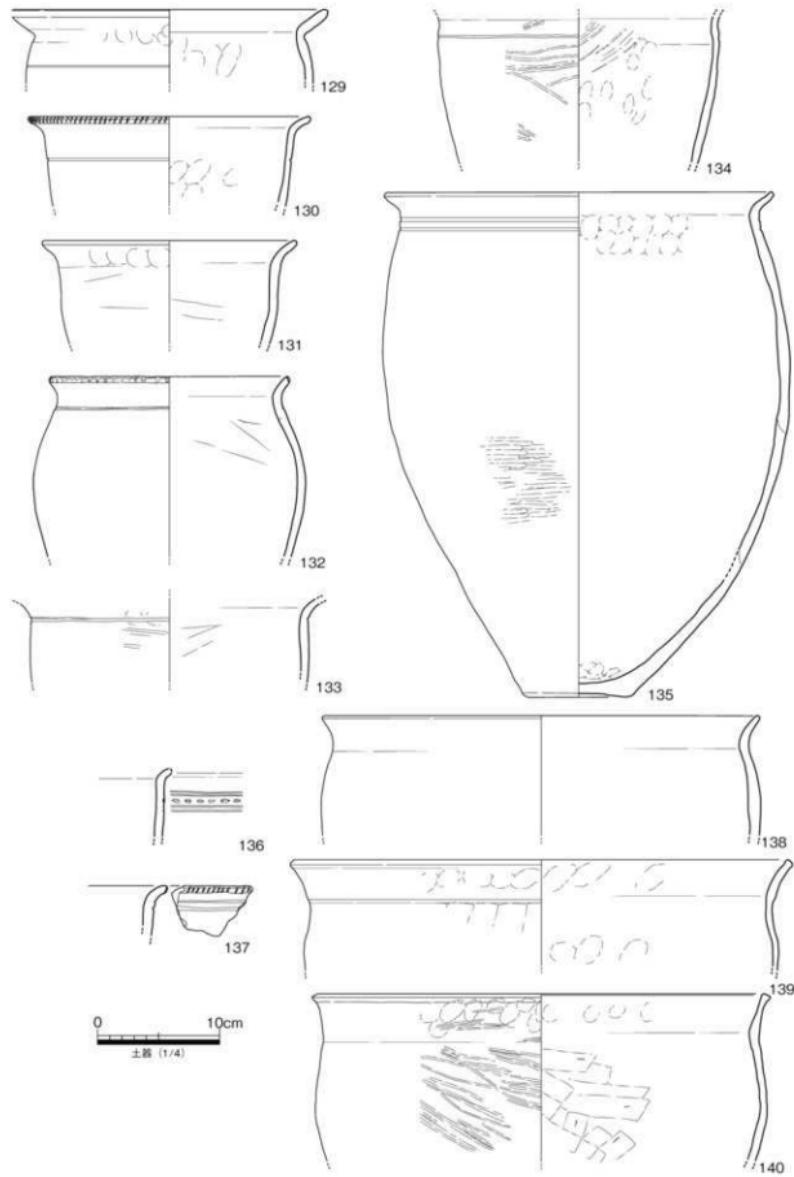
第43図 SD302 平・断面図



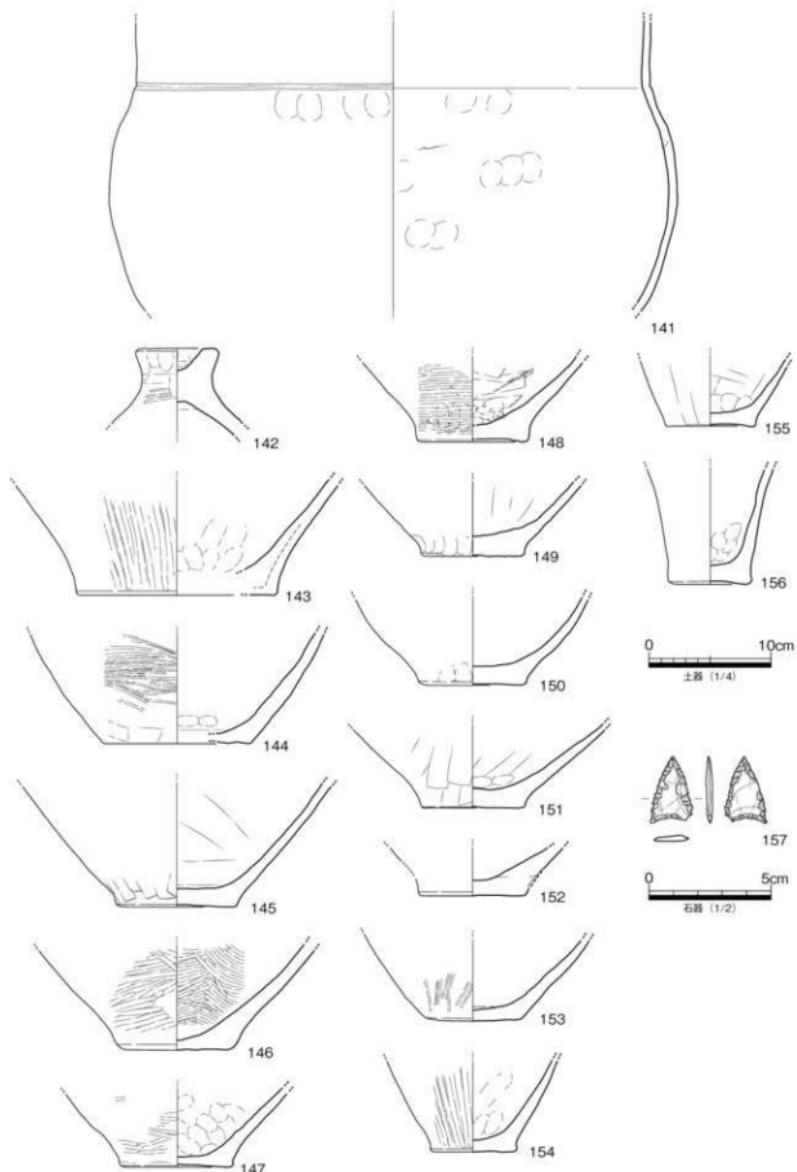
第44図 SD302 出土遺物(1)



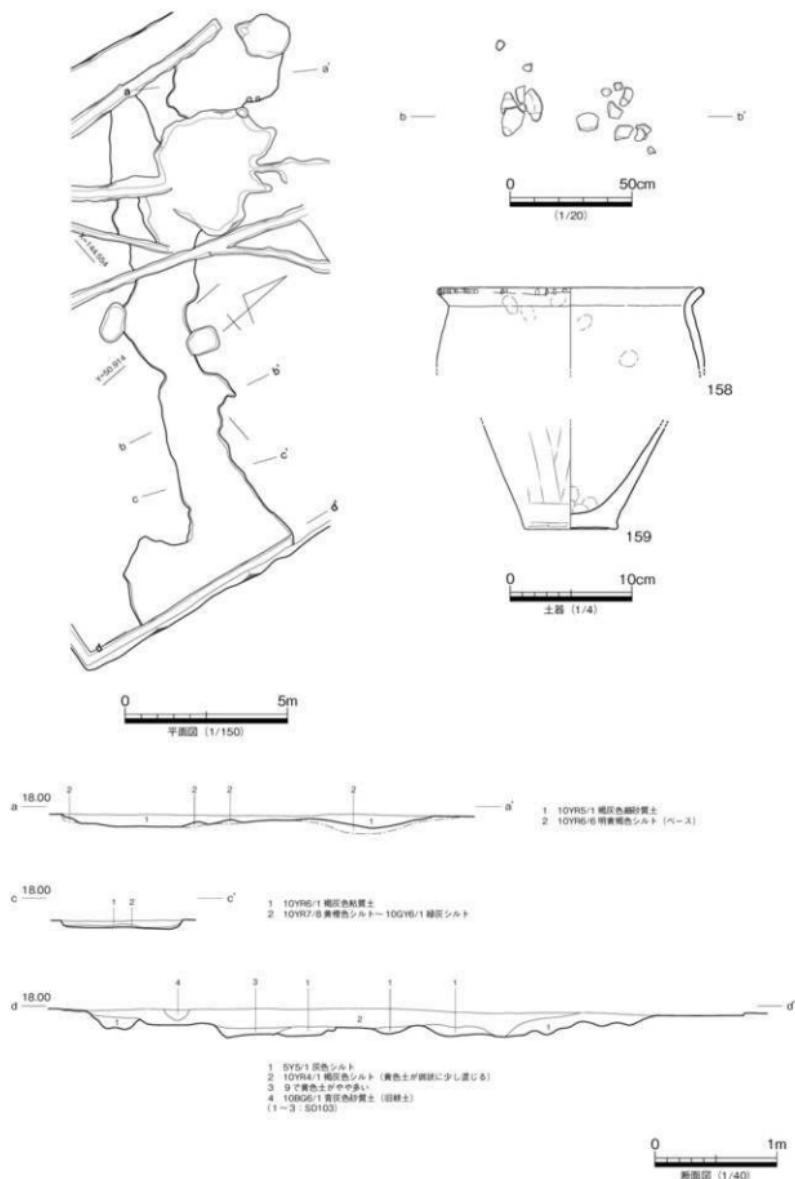
第45図 SD302 遺物出土状況



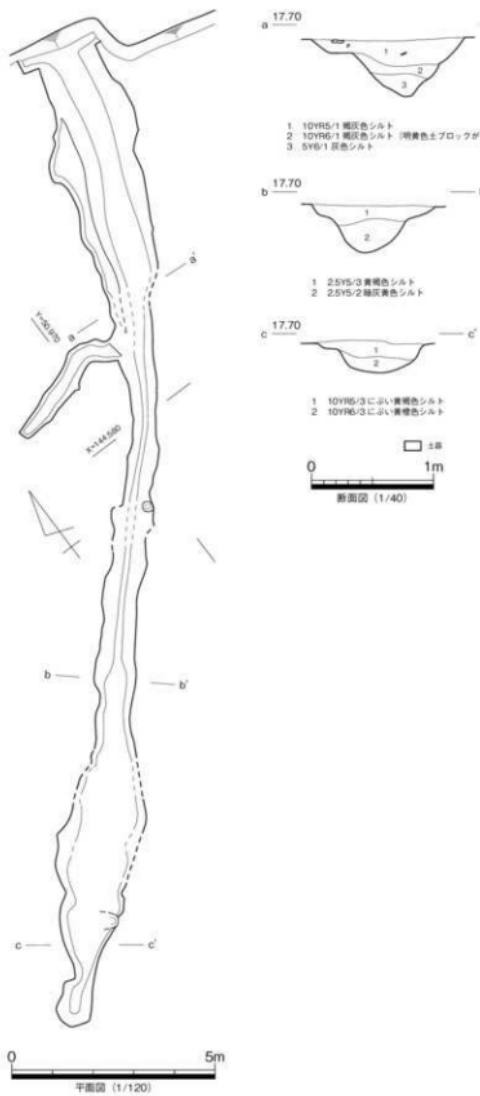
第46図 SD302 出土遺物(2)



第47図 SD302 出土遺物(3)



第48図 SD103 平・断面図、出土遺物



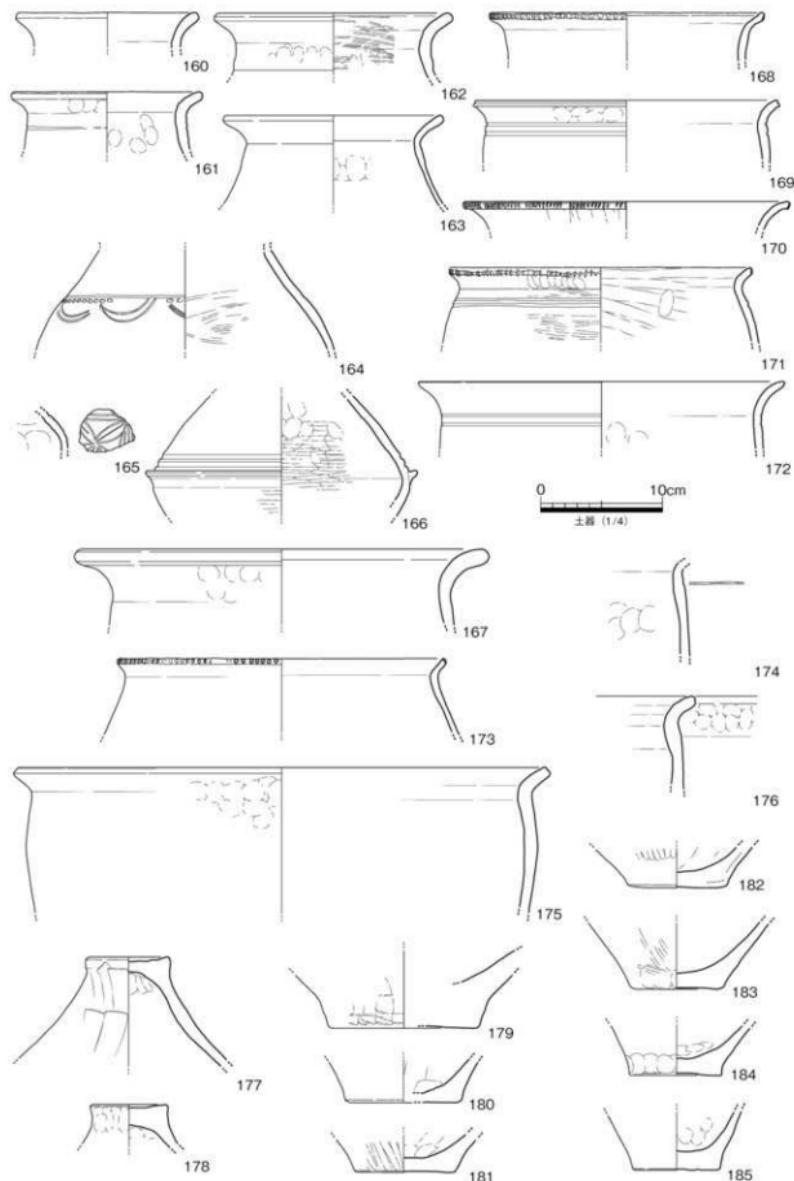
第 49 図 SD308 平・断面図

み目を付け、頭部の下部に 2 条のヘラ描き沈線を描く。122～124は大型壺。122・123は胎土・形態が類似する。124は頭部に段を持つ。125～137は壺。125・126は口縁部直下に突帯を巡らせる。126は突帯に刻み目を付ける。127は体部上部に削り出しによる段を持つ。128・130は口縁端部に刻み目を、129・130は体部上部にヘラ描き沈線を巡らせる。132は口縁端部に刻み目を施し、頭部直下をヘラ描き沈線により段を作る。136はヘラ描き沈線 2 条 + 円形刺突文 + ヘラ描き沈線 2 条を、137は口縁端部に刻み目を、口縁部直下にヘラ描き沈線を 2 条巡らせる。138～141は鉢。141は摩滅が著しいが、体部の屈曲部に削り出しによる段を付ける。142は壺の蓋。頂部に窪みを持つ。143～153は壺底部。154～156は壺底部。157は石鎚。凹基式。縁辺部のみ加工する。サスカイト製。

113・118・137・142など一部弥生時代 II a 期に下るものもあるが、概ね遺物は弥生時代 I c 期と考えられる。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代前期 I c 期～II a 期と考えられる。
SD103・SD308（内環濠）（第 48 図～第 50 図）

I 区南部で SD103 を、III 区西部で SD308 を検出した。両者は同一の溝と考えられる。SD103 は検出長 15m、幅 195cm、深さ 6cm で浅



第50図 SD308 出土遺物

い。埋土は褐灰色細砂質土である。調査区西端部では消失する。調査区東端では溝の埋土中にベースと考えられる黄色土が多く混じり、溝のラインも不明瞭になる。東端ではSK121と向き合う位置で南側へ張り出す形状となる。

SD308は検出長24.3m、幅55~180cm、深さ22cm、埋土は褐灰色シルト、黄褐色シルトである。溝底のレベルは外環濠同様西南側(SD103)が高く北東側(SD308)が低い。環濠の規模は外環濠よりもやや規模は小さいが、溝底のレベルの差は最大でも10cm程度でそれほど変わらない。SD308は調査区南端付近で一度途切れ、幅0.8m程度の陸橋部を作り、その南側に壠(93)を埋納する遺構を配し、SX216へと繋がる。

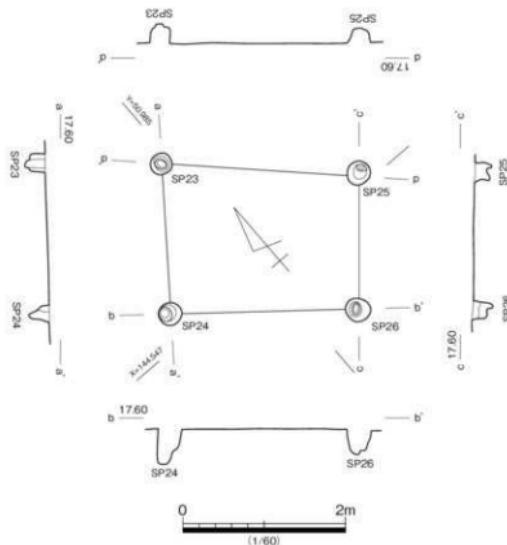
158・159はSD103から出土した弥生土器である。158は壠。口縁端部に刻み目を施す。159は壠底部。

160~185はSD308から出土した弥生土器である。160~167は壠。161は頭部上部にヘラ描き沈線1条、162は削り出しにより段を作る。164は壠体部。体部上半に段を持つ沈線を巡らせ、その下部に列点文、連弧文を施す。165は体部小片。有軸木の葉文を描く。166は壠体部。体部中位に突帯を、その上部に沈線を2条巡らせ、内外面とも丁寧に磨く。168~174は壠。168・170・171は口縁端部に刻み目を持つ。169は頭部にヘラ描き沈線を施す。上側のヘラ描き沈線は段状を呈する。175・176は鉢。177・178は壠の蓋。ともに頂部はわずかに窪む。179~183は壠底部。184・185は壠底部。

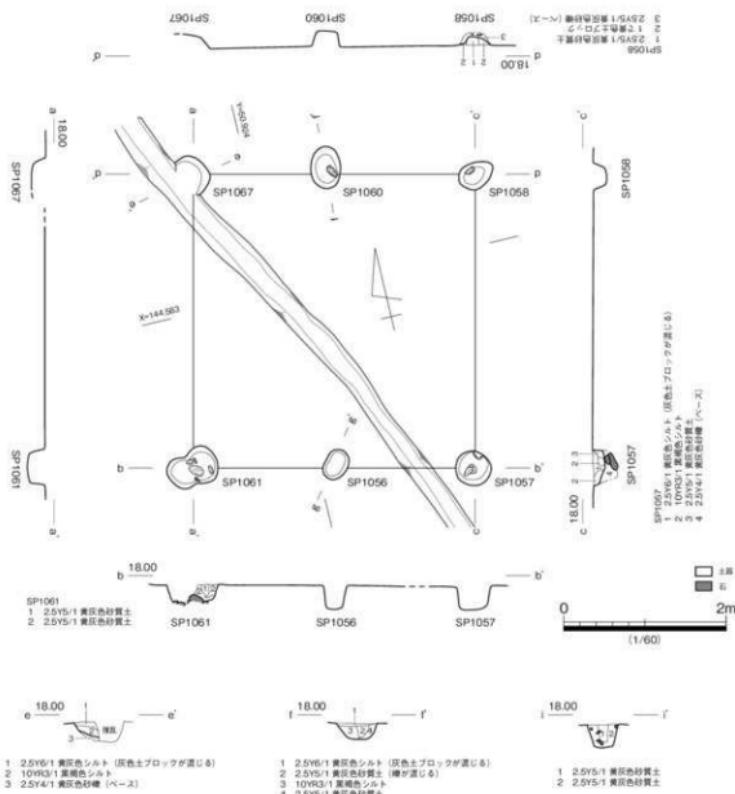
出土遺物は大半が弥生時代前期I c期で占められ、遺構の時期は弥生時代前期I c期と考えられる。

2. 弥生時代後期

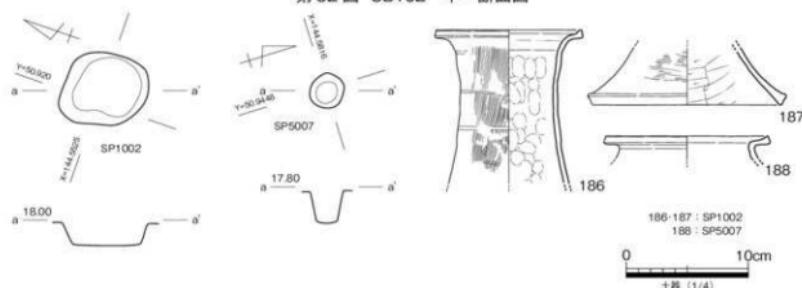
①堅穴建物



第51図 SH401 平・断面図



第52図 SB102 平・断面図



第53図 弥生時代後期ピット 平・断面図、出土遺物

SH401(第51図)

IV区中央付近で検出した。第2遺構面から検出した。短辺1.75~1.85m、長辺2.35~2.45mで主軸方位はN46.9°Wである。柱穴は概ね円形で、直径30cm程度、深さ20~40cm程度である。埋土中からは、胎土に角閃石を含む弥生時代後期の土器小片が出土した。柱穴の周囲に掘り込みは認められなかつたが、柱構造が1間×1間であることから、堅穴建物の柱穴のみ残存したものである可能性が高い。

第2遺構面から検出したこと、出土遺物から遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

②掘立柱建物

SB102(第52図)

I区北端で検出した掘立柱建物である。桁行2間(3.46m)、梁間1間(3.64m)、桁行の柱間は1.72m~1.76mで、面積は12.59m²である。主軸方位はN 103.4°Eである。柱穴は円形で直径40cm程度、または梢円形で長軸50cm・短軸30cm、深さ10~20cm程度の円形である。柱穴の埋土は柱痕跡が黄灰色砂質土、柱掘方は黒褐色シルトが多い。柱穴からは弥生時代後期の土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期は決めがたいが、掘立柱建物の構造や出土遺物などから弥生時代後期と考えられる。

③ピット

SP1002(第53図)

I区南端付近、SD103上面で検出した。梢円形で長軸65cm、短軸57.5cm、深さ19cmである。埋土中からは弥生土器が出土した。

186・187は弥生土器である。186は長頸壺。外側は緩い沈線を3条施し、内面は指頭圧痕を頗るに残す。187は高杯脚部。いずれも香東川流域産土器である。弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉である。

SP5007(第53図)

II区中央付近、SD205の西側で検出した。円形で直径30cm、深さ26cmである。埋土中からは弥生土器壺が出土した。

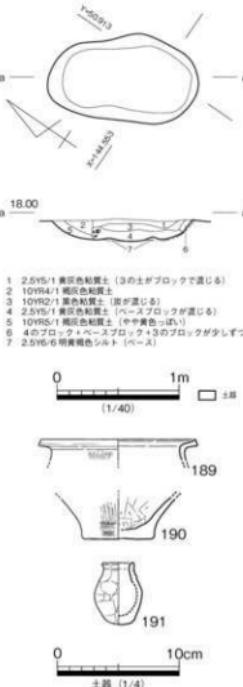
188は壺小片。香東川流域産土器である。弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉である。

④土坑

SK103(第54図)

I区南部、SD103中央部付近で検出した土坑である。SD103の上面で検出した。梢円形で長



第54図 SK103 平・断面図、出土遺物

軸1.26m、短軸0.62m、深さ17.2cm、埋土にはベースブロックが多く含まれ、埋土中位には炭混りの黒色粘土が堆積する。埋土中からは弥生土器片が出土した。

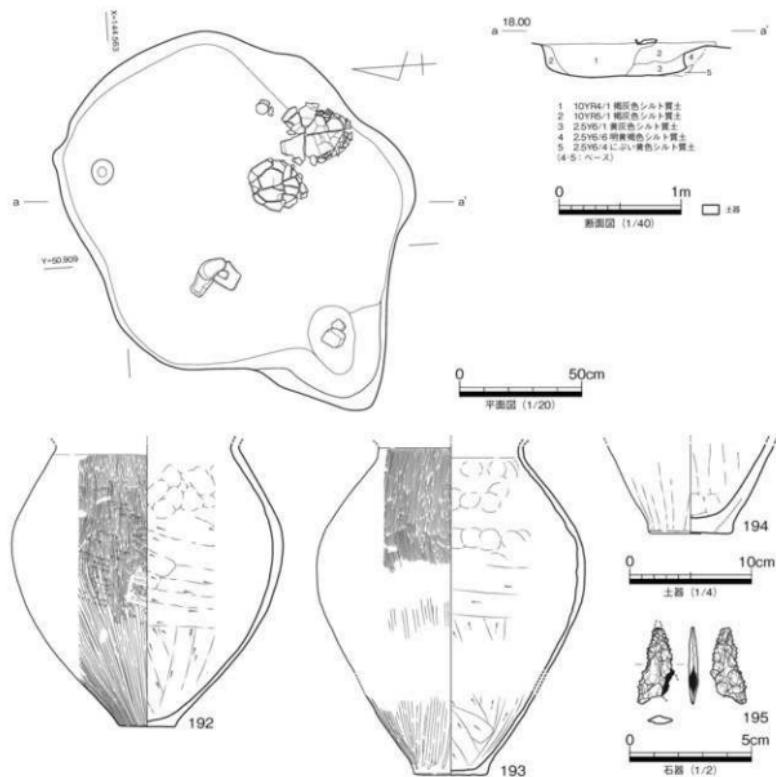
189～191は弥生土器である。189は壺。香東川流域産土器。190は甕底部。191はミニチュア土器壺。弥生時代後期中葉に相当する。

遺構の時期は出土遺物により弥生時代後期中葉である。

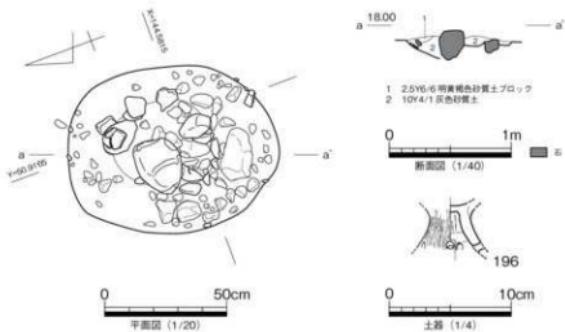
SK108(第55図)

I区中央部西端付近で検出した。不整形の土坑で、南西部にやや張り出す深い部分がある。長軸1.69m、短軸1.25m、深さ26.4cmで埋土はおもに褐灰色シルト質土である。

土坑の最上部付近で、北側へ口縁を向けた横向けの状態で壺が2個体出土した。削平により上部1/2強が欠けた状態で出土した。



第55図 SK108 平・断面図、出土遺物



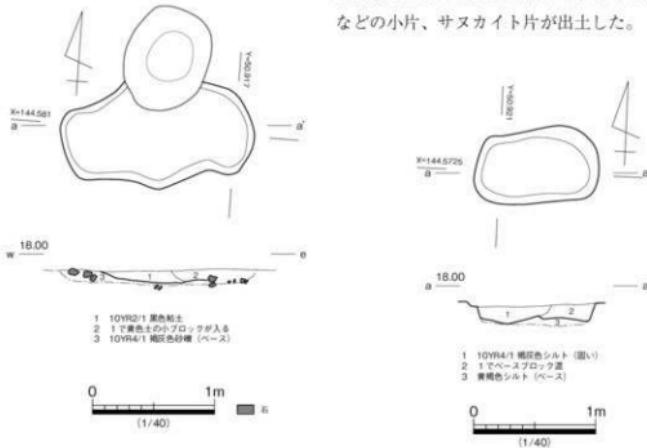
第 56 図 SK110 平・断面図、出土遺物

192～194は弥生土器。192-193は甕。ともに体部外面上半はハケ、下半はヘラミガキで調整し、内面中位から下部にかけてはヘラ削り、上部には指頭圧痕を顯著に残す。194は甕底部。弥生時代前期 I c 期のもので混入と考えられる。これ以外は弥生時代後期中葉に相当する。195はサスカイト製打製石錐。凹基式。

遺構の時期は出土遺物により、弥生時代後期中葉である。

SK110(第 56 図)

I 区北部で検出した土坑である。楕円形で長軸 0.85m、短軸 0.69m、深さ 18.1cm である。SK111 の上面から切り込む。土坑内には 5～20cm 大の蝶が投棄された状態で出土した。埋土中からは弥生土器甕・高杯・底部などの小片、サスカイト片が出土した。



第 57 図 SK111 平・断面図

第 58 図 SK113 平・断面図